平成二十九年九月十八日発行

あれから四十年

日本人をアメリカに認識させた幕末の海外留学生

酒井康行

公益社団法人福井青年会議所第十四代理事長

福井北ロータリークラブ第三十五代会長

はじめに

本書は、福井の先駆者、日本最初の留学生　日下部太郎が、一八六七年（慶応三年）渡米した事から歴史は、始ります。アメリカ州立ラドガース大学に留学し優秀な成績を残し、志半ばで他界されました。ラドガース大学でのグリフィス先生との出会い。その後、グリフィス先生の日本訪問。福井での精力的な教育活動。その後、日本国内での数々の教育活動の基礎を築かれ東京大学の創立へと続きます。

この事実が日本の教育界を動かし、明治維新へと時は流れて行きます。この日下部太郎から始まりました史実を顕彰し、青年会議所運動の事業として、一九七五年六月ラドガーズ大学へ調査視察へ赴き、翌年一九七六年（昭和五十一年）日下部太郎顕彰碑事業へ繋がり、アメリカ駐日大使を福井での式典に招聘致し盛大に開催致しました。

その後、四十年の歳月が過ぎ、この事業から、

一九八〇年（昭和五十五年）三月、日下部グリフィス学術文化交流基金の設立。

一九八一年（昭和五十六年）十月、福井大学、ラドガー大学の姉妹大学提携調印。

一九八二年（昭和五十七年）五月二十五日、福井市にて、福井市とニューブランズウイック市との姉妹都市提携調印。

これらの歴史は、福井の地での日下部太郎顕彰事業から、国際交流へ発展した史実を資料として編集しました。

彼こそが　サムライ　日下部太郎なのだ。

今後、福井の誇り（日下部太郎）を子どもたちや福井県民に伝え役立てて頂きたく思います。

最後に、この事業　日下部太郎顕彰事業に多大なるご協力を頂きました、故・若泉敬先生を偲ぶ書になれば幸いです。

合　掌。

公益社団法人　福井青年会議所とは、

一九四九年、明るい豊かな社会の実現を理想とし、責任感と情熱をもった青年有志による東京青年商工会議所（商工会議所法制定にともない青年会議所と改名）設立から、日本の青年会議所（ＪＣ）運動は始まりました。

共に向上し合い、社会に貢献しようという理念のもとに各地に次々と青年会議所が誕生。1951年には全国的運営の総合調整機関として日本青年会議所（日本ＪＣ）が設けられました。

現在、全国に青年会議所があり、三つの信条のもと、よりよい社会づくりをめざし、ボランティアや行政改革等の社会的課題に積極的に取り組んでいます。さらには、国際青年会議所（ＪＣＩ）のメンバーとして各国の青年会議所と連携し、世界を舞台として、さまざまな活動を展開しています。

福井青年会議所は、青年が英知と勇気と情熱をもって能動的に活動できる機会を提供することにより、会員の連携と指導力の啓発を通じて社会奉仕の進展や国際理解の深化による地域社会の健全な発展を図り、もって青年の自立と社会の連帯がいきいきと相和する明るい豊かな社会の実現に寄与することを目的とします。

創立昭和二十六年四月十八日。創立しましたが、社会情勢の変化から一度、解散、再構築をし設立。昭和三十七年十一月十七日（承認番号二四四）としてスタート。本年、創立五十五周年を迎えます。

（上記本文、公益社団法人　福井青年会議所ホームページ引用）

・青年会議所とは、どのような団体なのか。
・日下部太郎の紹介。
・グリフィス先生の紹介。
・日下部太郎顕彰事業の企画・立案。
・若泉敬先生の紹介。
・大正十五年六代目永井環福井市長は、昭和五年十月発行「新日本の先駆者　日下部太郎」の中に歴史的事実の報告。
・昭和二年グリフィス博士夫妻五十年ぶり来福。日下部記念碑に二十円提供。
・昭和四十三年　酒井康行　社団法人福井青年会議所　入会
・訪米に関する情報収集。
・昭和五十年　酒井康行　社団法人福井青年会議所　理事長就任。
・昭和五十年六月二十一日～七月四日、調査団アメリカ合衆国訪問。
・六月二十九日アイビーエム・ＪＴワトソン研究所（ニューヨーク）　訪問。
・州立ラドガー大学への訪問。
学長：エドワード・ブロンスタイン　副学長：アルダスバークス博士
国際関係部長：リチャード・ウイルソン　アレキサンダー図書館長
ニューブランズウイック市長：リチャード・マリガン
ニューブランズウイック商工会議所会頭　Ｊ・ガースキン
ラリタン青年会議所会頭
・七月一日ウッドローウイルソン国際学術研究所（ワシントン）訪問。
フェロー待遇　若泉敬先生を訪問。
・昭和五十年七月九日　日下部太郎墓地再建へ。
・昭和五十一年九月十七日アメリカ建国の二百年　若泉先生とアメリカ大使館へ。
駐日米大使館　大使　Ｊ・Ｄ・ホッドソン氏訪問。

昭和五十一年十一月三日　除幕式、記念式典
・昭和五十二年十月十九日　日下部太郎百年忌。合同慰霊祭
ラドガー大学内パトリック教会にて大武福井市長、市橋会頭参列。随行者　通訳　堂下健二　案内人　酒井康行
ニュークタイムズ誌に掲載される。
・昭和五十三年　日下部グリフィス学術文化交流基金設立
・昭和五十五年（一九八〇）九月九日～十日　マンスフイールド米国大使来福
・昭和五十六年（一九八一）十月　福井大学とラドガー大学　姉妹大学提携調印。
・昭和五十七年（一九八二）五月二十五日　福井市とニューブランズウイック市姉妹都市提携調印。
・昭和五十七年（一九八二）十一月三日　ラドガーズ大学元副学長　バークス博士来福。
・日下部・グリフィス学術文化交流基金のしおり（資料）
・昭和五十八年（一九八三）九月二十四日　Ｄｒ.ロストウ夫妻　来福。
・姉妹都市提携二十五周年記念　福井国際交流協会（資料）
・昭和六十三年十二月十八日　ワールドプラザ掲載（日下部太郎）松村正義氏（帝京大学教授）
・昭和五十年五月二十五日発行　ハドソン川は流れる―私の日米外交史―　松村正義氏（帝京大学教授）
・平成十三年五月三十日　福井北ロータリークラブ会報一五五九号
・平成十四年十月二十六日　福井市・ニューブランズウイック市姉妹都市二十周年記念シンポジュウム
・平成十四年十一月九日　二十周年を迎えた姉妹都市交流　堂下健二氏　福井新聞掲載
・平成十四年十一月十七日　福井青年会議所四十周年　未来につなげ日下部精神　福井新聞掲載
・平成二十一年（二〇〇九）八月一日発行　選択八　幕末期の米国留学と今　紺野大介氏
・平成十九年（二〇〇七）十月十一日　友情が残した宝物　ＪＣの渡米発端　福井新聞掲載
・平成二十四年（二〇十二）福井市・ニューブランズウイック市姉妹都市提携三十周年
・福井市とニューブランズウイック市の今までの交流経過

日下部太郎の紹介

弘化二年六月六日（一八四五年七月十日）―明治三年四月十三日（一八七〇年五月十三日）は、幕末の越前福井藩士。

八木郡衛門とおくまの長男として福井江戸町（現在の福井市宝永四丁目）で生まれる。旧名は八木八十八（やぎやそはち）。

八木家は福井藩に仕え、その役は「御先物頭（おさきものがしら）」（城の重要御門や建物の守護がその役目）で、身分は中くらいであった。少年時代は、剣術に励み、大いに遊ぶ一見すると普通の子供のようだが、読書が好きで十歳の頃には漢文を白文で読める程の学才を持っていた。十三歳の時に福井藩校・明道館（当時、この藩校の入学資格は十五歳以上の藩士子息だった）に進み学問に励み、二十歳の時に山岡次郎とともに長崎へ遊学。そこでは横井小楠の甥である横井左平太（伊勢佐太郎）、横井太平（沼川三郎）兄弟と共にグイド・フルベッキが教える済美館で英語習得に励む。二十二歳の時に海外旅行免許状―いわゆるパスポート（幕府の免許状発行が4番目であることから当時日本でも留学創成期に渡米したことが伺える）を携え渡米。

遊学先の長崎からジャワを経てアメリカへ向かう。この時に藩主の松平春嶽から日下部太郎の名を拝命（日下部は八木家の先祖の姓）。

百五十日の航海の末にニュージャージー州ニューブランズウィックに到着。ここで一年前に密航で海を渡っていた伊勢佐太郎と沼川三郎の兄弟に出迎えられる。

ラトガース大学入学前に付属中学に入学し英語と基礎教育を受ける。ここの教師をしていた2歳年上でラトガース大学生でもあったウィリアム・グリフィスと出会う。二十三歳の時ラトガース大学に入学し二年に編入された。藩からの乏しい仕送りだけで赤貧洗うが如き生活の中にあって、常にクラスの首席である程優秀であった。通常四年かかるところを三年で習得し、滞在期間の僅か三年で読破した本はゆうに二百冊を超えていたと伝えられる（これらの本は遺品として故郷に送られた）。

（通説では日下部太郎はラトガース大学第二学年に編入し、卒業を目前とした第四学年のときに死亡したことになっている。そのため「通常四年かかるところを三年で習得」と信じられてきた。しかし近年公開されているラトガース大学の当時の大学要覧を確認すると、太郎の入学した同大学理学部は当時三年制であったことがわかる。実際、ラトガース大学要覧の一八六八年版に太郎の名前は理学部の一年生に、一八六九年版には二年生、一八七〇年版には三年生のところに彼の名前があり、一八七〇年卒業予定となっている。太郎が同大学の二年に編入したというのは、当時同大学の理学部が三年制であることを

知らなかった研究者のつじつま合わせと思われる。）

しかし卒業が近くなった時に、気候風土の違い、貧しい生活、過度の勉学から結核を煩い入院を余儀なくされる。入院中は医師から絶対安静を言いつけられるも隠れて読書し、遂には見つかって全て没収される程であった。

結局、静養の甲斐無く、卒業を待たずして夭逝した。二十五歳であった。ラトガース大学の校長以下関係者は、この日本最初の留学生であり、内外を通じて抜きんでいた秀才の死を悼み、大学横の墓地ウィロー・グローブ・セメタリーにその亡骸を埋葬し立派な墓碑を建立した。その墓には、「大日本越前日下部太郎墓」と日本語表記されている。更にその学業と人格の優秀さを認め卒業生と同格の資格を与え、その大学の優秀な卒業生で組織されたファイ・ベータ・カッパー協会の会員に推薦し、その証の金の鍵（懐中時計のネジ巻きに使うもの）を与えた（この金の鍵は八ヵ月後に福井藩に講師として招聘されたウィリアム・グリフィスによって故郷の父に手渡された）。

遺品と遺髪は故郷に送られ、本は明新館と名を変えた藩校に寄贈され、遺髪は父が福井市宝永四丁目の清円寺に葬ったと伝えられる。なお、寄贈された殆どの本は焼失している。

法名は、篤信院仰譽睦肥善道居士

参考文献

『日本の先駆者　日下部太郎』（永井環著、福井評論社、一九三〇年）
『よみがえる心のかけ橋―日下部太郎/W・Eグリフィス―』
（福井市立郷土歴史博物館一九八二年）
（ウィキペディアからの引用、編集）

ウィリアム・エリオット・グリフィス紹介

（William Elliot Griffis, 一八四三年九月十七日 ― 一九二八年二月五日）は、アメリカ合衆国出身のお雇い外国人、理科教師、牧師、著述家、日本学者、東洋学者である。

明治時代初期に来日し、福井と東京で教鞭をとった。帰国後は日本の紹介につとめたほか、朝鮮についても紹介した。

一八四三年、アメリカ合衆国ペンシルベニア州フィラデルフィアに、ジョン・メリバーナとアンナ・マリア・ヘスの四番目の子供として生まれる。オランダ改革派教会系の大学であるニュージャージー州のラトガース大学を卒業。

ラトガース大学で福井藩からの留学生であった日下部太郎と出会い、親交を結ぶ。その縁により明治四年（一八七一年）に日本に渡り、福井藩の藩校明新館で同年三月七日から翌年一月二十日まで理科（化学と物理）を教えた。天窓のついた理科室と大窓のある化学実験室を設計したが、これは日本最初の米国式理科実験室であったらしい。

明治四年（一八七一年）七月、廃藩置県により契約者の福井藩が無くなった。明治五年（一八七二年）、フルベッキや由利公正らの要請により十ヶ月滞在した福井を離れて大学南校（東京大学の前身）に移り、明治七年（一八七四年）七月まで物理と化学、精神科学など教えた。

明治八年（一八七五年）の帰国後は牧師となるが、米国社会に日本を紹介する文筆・講演活動を続けた。一八七六年にアメリカで刊行した *The Mikado's Empire*（『ミカドの帝国』あるいは『皇国』と訳される）は、第一部が日本の通史、第二部が滞在記となっている。

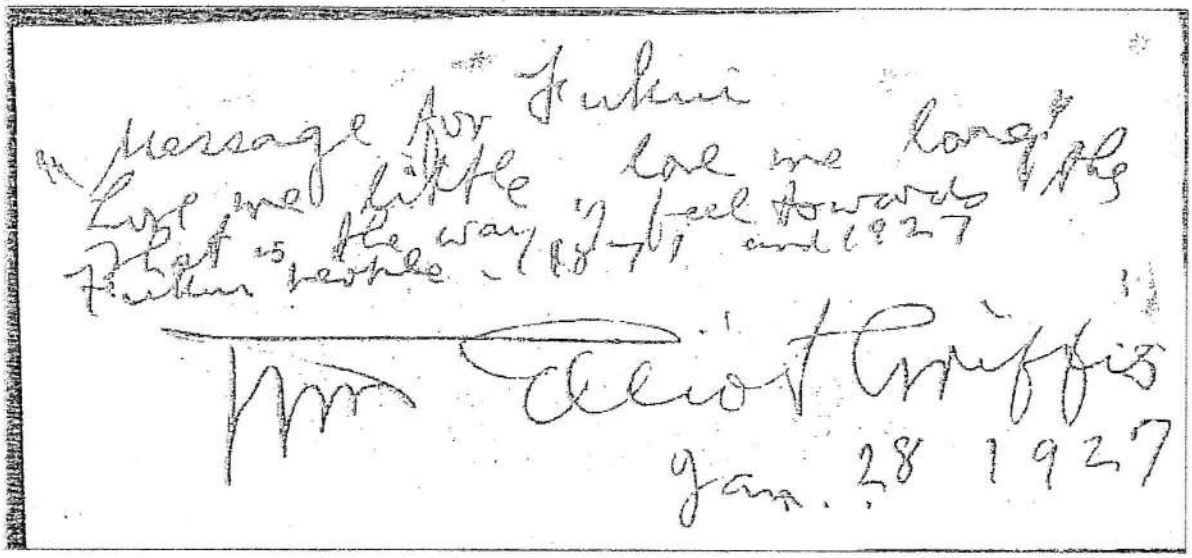
日本滞在中に記した日記や書簡、収集した資料は、グリフィス・コレクションとしてラトガース大学アレクサンダー図書館に収蔵されている。日下部やグリフィスの縁で、ラトガース大学のあるニューブランズウィック市と福井市は一九八二年に姉妹都市提携を結んでいる。

（ウィキペディアからの引用、編集）

グリフィス夫妻の和服姿

下記のサインはグリフィス博士が福井に残したいことば。Jan。28　1927（大阪毎日新聞福井版切り抜き）。

"Love me little,　love me long。"　「思い出さなくていいが忘れないでほしい」



Dr. and Mrs. Griffis.

The intricate feudal system was abolished by the voluntary renunciation on the part of daimyos and samurai, and likewise on the part of their subordinates, of special privileges and rights. Such a renunciation —a veritable revolution, yet accomplished without the shedding of a drop of blood — has virtually never been paralleled in world history.

'The Way of Um'e'

By Edith A. Sawyer

1928

（W. E. グリフィスの序文がある）

a

(昭和2年)

75. 日本でのグリフィス夫妻、1926-1927年

グリフィスは日本政府の招待客として6ヶ月間だけ日本に戻ってきた。妻フランシスとともに、彼は日本国中を旅行し、彼が1870年代に訪れた場所を再訪し、さらに韓国と満州にも立ち寄った。常に活動的で250回もの講演を行い、その中には皇室や癩病患者に対して行ったものもあった。どこへ行ってもグリフィス夫妻は王族のような歓迎ぶりで多大な賛辞と土産物を与えられた。福井へ戻ったことにグリフィスは最も喜び、「福井での歓待が特に嬉しかった…4日間はとても楽しかった。町中に飾り付けがしてあり、数万人の学生が外に出て私を出迎えてくれた。」と記している。

75a. グリフィス夫妻と松平一家の写真、東京都麻布、1927年6月5日

この写真は、グリフィスが日本に意気揚々として戻ってきたとき、福井藩主松平慶永(春嶽)の末裔とともに撮影された。改革者として知られる春嶽公は、教育改革を勧めるため、57年前に若きグリフィスを福井に招き入れた。

左から右へ:後列　松平幸子夫人、グリフィス夫人、長女美智子、長男永芳、伯爵松平康荘; 前列　次女綾子、次男忠永、グリフィス、三女英子、松平節子夫人

松平家からの贈り物

日下部太郎顕彰事業の企画・立案

明治維新は、新しい日本の夜明けといわれています。その目前、慶応三年、日下部太郎は、越前藩主　松平春岳公の命を受け米国のラドガー大学に留学します。彼は、西洋の学問を学び日本で開花させるという使命を目的に日夜勉学に励みますが、卒業をまじかにひかえ病死しました。しかし彼の才能と遺徳は、グリフイス博士の来福によって福井県教育界の発展に生かされます。

この日下部太郎の顕彰事業に取り組み、彼の日本を思う心、福井につくす心と、その強烈な達成意欲を、私たち福井の若者をはじめ全ての人に知っていただき、福井県民としての誇りとして頂き、後世に伝えたく顕彰碑の設立となりました。

（会議資料）第二回　日下部太郎特別委員会

日時：昭和五十三年九月四日　場所：㈱酒井染料商会　セクレタリー：中村隆夫

① ＪＣの教育問題
② 小学校への啓蒙
③ 十月十八日・十一月三日福井市・ニュージャージーｄａｙの記念日
④ 国際交流（留学生派遣）
⑤ 優秀者の海外派遣による英作文コンクールの権威づけ
⑥ ニュージャージーＪＣとの作文交換
⑦ 日下部太郎講演の中学校まわり
⑧ 市内中学校の卒業式にＪＣ賞
⑨ 日下部太郎基金に対する協力
⑩ 堕涙碑説明文
⑪ 小中学校の日下部太郎の本の作成
⑫ 劇、シナリオ、小説化
⑬ 日下部太郎の時代の越前藩の背景
⑭ 他の偉人発掘（調査研究）

⑮ 日米文化交流のきずなに関した事業

← 福井未来の会

福井市・福井大学・ＪＣの連絡協議会の設置の注意点

① ＪＣは、個々の事業（大学・市）には直接関与しないが、但し側面的には協力をおしまない。

② イニシアティブは、岡田・山口・加藤・酒井・石橋・堂下がとり福井大学学長・福井市長に呼び掛ける。

③ 十月十八日ニュージャージー福井ｄａｙ、姉妹都市、進行状況確認

ＪＣの方針発表

報告書の作成（昭和五十一年十一月三日以降）

内容 ①市・大学への進展状況

②ラドガース大学及びUSA

（ニューヨークジャパン、ニューブランズウイック市）

③ 発行者 ＪＣ理事長 編集責任者 酒井康行

④ 対象：ＪＣ会員、ＪＣＯＢ、一般、福井県、福井市、小中学校、高校、ラドガース大学、ニュージャージー市

⑤ 発行部数 単価三百円で五百部

⑥ 予算：編集費二万円 小冊子十五万円 計十七万円

運営方針

啓蒙

① 英作文コンテスト（中学生）

② 中学校まわり

③ 小中学校に日下部太郎単行本の発行

④ 教育・歴史・（カリキュラム）

⑤ 劇・シナリオ・紙芝居・小説
⑥ 越前藩の教育歴史
⑦ 福井の偉人の調査研究
⑧ 福井史跡まわり
⑨ ＪＣアワードの申請
⑩ 中学校対象にＪＣ賞、日下部賞

国際交流事業

① ニュージャージー・福井ｄａｙ、十月十八日
② 日米文化交流事業推進役
③ 福井市・福井大学への協力体制
④ 石碑の説明文の作成
⑤ 福井未来を考える会

タイムスケジュール

上旬　福井市長・福井大学学長訪問、
中旬　特別委員会主催連絡協議会
下旬　報告書の骨子作成…九月
十月　小冊子の校正
十一月　印刷
十二月　小冊子完成、

この事業への最大の協力者、福井青年会議所　顧問　若泉敬先生の紹介

若泉　敬　わかいずみ　けい、一九三〇年（昭和五年）三月二十九日 - 一九九六年（平成八年）七月二十七日）は、日本の国際政治学者。沖縄返還交渉において、佐藤栄作の密使として重要な役割を果たしたとされる人物。

福井県今立郡服間村（現越前市横住）で、父・齊と母・マツエの長男として生まれる。服間尋常小学校卒業後、福井青年師範学校に進学し、後に妻となる根谷ひなをと出会う。一九四九年（昭和二十四年）、師範学校本科を卒業し、明治大学政治経済学部政治学科に進学するが、一年後の一九五〇年（昭和二十五年）、東京大学法学部を受験し合格。在学中、矢崎新二、岩崎寛弥、佐々淳行、粕谷一希、福留民夫、池田富士夫などと親交を深め、学生研究会土曜会のメンバーとして活動し、芦田均などの政治家や大山岩雄などの言論人の知遇を得る。一九五二年（昭和二十七年）に国連アジア学生会議の日本代表としてインドとビルマを訪問し、このときの体験をもとに大林健一の筆名で『独立インドの理想と現実』と題する小冊子にまとめて刊行した。

一九五四年（昭和二十九年）、東京大学法学部政治学科卒業後、佐伯喜一の知遇を得て、保安庁保安研修所教官となる。

一九五七年（昭和三十二年）ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス大学院修了。一九六〇年（昭和三十五年）、米国ジョンズ・ホプキンス大学高等国際問題研究所（SAIS）に留学。客員研究員として滞在中、マイク・マンスフィールド、デイーン・アチソン、ウォルター・リップマン、ウォルト・ロストウらと面識を持つ。

一九六一年（昭和三十六年）より防衛庁防衛研究所所員。一九六六年（昭和四十一年）、創立に貢献した京都産業大学より法学部教授として招聘され、同大学の世界問題研究所所員を兼任した。

佐藤首相の密使

一九六六年頃から、面識のあった愛知揆一の紹介で時の首相・佐藤栄作に接触するようになる。佐藤は「沖縄の祖国復帰が実現しない限り、日本の戦後は終わったとは言えない」と演説したように、沖縄返還に並々ならぬ熱意を持って臨んでいた。翌一九六七年（昭和四十二年）、自由民主党幹事長・福田赳夫を通して、沖縄問題についての米国首脳の意向を内々に探って欲しいとの要請が伝えられ、これを期に密使として度々渡米し、極秘交渉を行うこととなる。若泉と会ったのはアメリカ国家安全保障会議スタッフのモートン・ハルペリンであった。ハルペリンは沖縄返還交渉の方針を決めた国家安全保障覚書十三号の起草者であった。

「核抜き・本土並み」返還の道筋が見えてきたところ、日米首脳会談直前の一九六九年（昭和四十四年）九月三十日、国家安全保障担当大統領補佐官のヘンリー・キッシンジャーより、「緊急事態に際し、事前通告をもって核兵器を再び持ち込む権利、および通過させる権利」を認めるよう要求するペーパーが提示された（なお、密使としての活動で、若泉はコードネーム「ヨシダ」、キッシンジャーは「ジョーンズ」を用いた）。同年十一月十日、十一月十二日の再交渉で、若泉は「事前通告」を「事前協議」に改めるよう主張、諒解を得る。この線で共同声明のシナリオが練られることとなり、十一月二十一日に発せられた佐藤＝ニクソン共同声明で、三年後の沖縄返還が決定されることとなった。

なお若泉は極秘交渉の経緯を記した著書『他策ナカリシヲ信ゼムト欲ス』（文藝春秋、一九九四年）において、核持ち込みと繊維問題について作成した日米秘密合意議事録の存在について触れている。同書によれば、佐藤とニクソンは、ウエストウイング・オーバルルーム隣の「書斎」で、二人きりになって署名したという

（この覚書は佐藤により持ち去られ、のち二〇〇九年（平成二十一年）に本人宅で発見された）。

後半生

その後は現実政治に関与することなく、学究生活に戻った。一九七〇年（昭和四十五年）から一九八〇年（昭和五十五年）まで京都産業大学世界問題研究所所長。その間、アーノルド・J・トインビーの京都訪問・講演の実現に尽力し、京都産業大学の知名度を高めることに貢献した。また一九六九年（昭和四十四年）から一九七一年（昭和四十六年）まで中央教育審議会臨時委員を務めた。

核時代における日本の平和外交・安全保障政策のあり方についてビジョンを構築し、『中央公論』などの論壇誌でその主張を提示していた。米国の国際問題評論誌『フォーリン・ポリシー』の編集顧問も務めた。

一九八〇年、東京から故郷・福井に居を移し、中央政界や論壇から距離を置くようになる。一九九二年（平成四年）の京都産業大学退職時には退職金全額を世界問題研究所に寄付し、同研究所ではこれをもとに「若泉敬記念基金」を設立した。

一九九四年（平成六年）、『他策ナカリシヲ信ゼムト欲ス』の上梓後、六月二十三日付で沖縄県知事・大田昌秀宛に「歴史に対して負っている私の重い『結果責任』を取り、国立戦没者墓苑において自裁（自殺）します」とする遺書を送り、同日国立戦没者墓苑に喪服姿で参拝したが自殺は思いとどまった。

その後、『他策ナカリシヲ信ゼムト欲ス』英語版の編集に着手。完成稿を翻訳協力者に渡した一九九六年（平成八年）

七月二十七日、福井県鯖江市の自宅にて逝去（享年六十七）。公式には癌性腹膜炎ということになっているが、実際には青酸カリでの服毒自殺だった。なお、若泉が「密使」を務めていた時期、学生だった谷内は若泉に師事していた。若泉の自殺の報を聞いた大田昌秀は「核密約を結んだことは評価できないが、若泉さんは交渉過程を公表し、沖縄県民に謝罪し、『結果責任』を果たした。人間としては信頼できます」とコメントしている。膨大な蔵書・文書・書簡等は、死去前に自ら処分している。

死後

二〇〇二年（平成十四年）、『他策ナカリシヲ信ゼムト欲ス』英語版がハワイ大学出版局から公刊された。また『正論』二〇〇六年九月号に、英語版序文の原稿が掲載されている。

核持ち込みについての密約は、信夫隆司が二〇〇二年（平成十四年）までに機密指定が解除された米政府公文書から、密約を裏付ける文書を発見した。キッシンジャーからニクソンへのメモで、日米間の密約を示す「共同声明の秘密の覚書」の存在に触れ、覚書が「核問題」に関するものであることを明らかにしている。日本側での所在は長らく確認されず、日本の政府・外務省は密約の存在を否定していたが、二〇〇九年十二月に佐藤栄作の遺品にこの密約と見られる「合意議事録」が存在し、遺族が保管していたことが報道された。

また、二〇一〇年（平成二十二年）三月九日、鳩山政権になってから、外務大臣・岡田克也の命令で、核密約があったか否かを調査してきた有識者委員会（座長：東京大学教授・北岡伸一）は、正式に（広義の）核密約があった旨の調査結果を報告した。これを受け政府（鳩山内閣）、外務省（岡田外相）はこれまでの、自民党政権および新生党政権下での、公式にはなかったとされてきた見解を改めた。

ただし、日本国政府が認めたのは初めてであるが、関係者の間では密約はあったというのは半ば常識化されていた。たとえば、この有識者委員会の座長を務めた北岡は、その著書『自民党――政権党の三十八年』（読売新聞社、一九九五年）の佐藤内閣の沖縄返還をめぐる記述において、若泉の『他策ナカリシヲ信ゼムト欲ス』を紹介し、若泉によれば「密約があったという」と記述している。

（ウィキペディアからの引用、編集）

武生公会堂記念館地域連携企画展・沖縄復帰40周年記念

国際政治学者　若泉 敬

昭和の橋本左 1934-18

平成24年11月22日(木)▶12月16日(日)

昭和42年(1967)から昭和44年(1969)にかけて、ときの総理大臣・佐藤栄作の信任状を携え、沖縄返還に関してアメリカ政府と極秘裏に折衝を行った国際政治学者・若泉敬は、昭和5年(1930)3月29日、福井県今立郡服間村横住(現越前市横住町)で生まれました。服間小学校、福井師範学校を経て、昭和24年(1949)大学進学のため上京するまで、福井で暮らしました。

東京大学を卒業した後は、保安庁保安研修所(現防衛省防衛研究所)、京都産業大学世界問題研究所に在任、国際政治学者としての研鑽に励みます。その間、ロンドン大学、ジョンズ・ホプキンス大学に留学し、多くの政治家や学者と交わり、人脈を広げました。

当時のアメリカ政府の関係者と知己を得た若泉は、結果として、直接ホワイトハウスと沖縄返還交渉を行う密使となります。その交渉により、沖縄は昭和47年(1972)5月15日に本土復帰を果たしました。今年は沖縄復帰から40年目の記念の年を迎えたことから、当館ではこれを機会に、郷土の偉人・若泉敬の企画展を開催します。

この企画展では、若泉が福井で過ごした19年間を第1部、上京後の学生時代や国際政治学者として活躍した時代を第2部、密使としての孤独なる戦いの日々を第3部、そして、福井に戻り隠棲する日々と尽きない沖縄への想いを第4部として構成し、それぞれの時代と彼の生きざまに焦点を当てて紹介します。

若泉の66年間の人生は、渾身を込めて書き上げた自著『他策ナカリシヲ信ゼムト欲ス』の英訳本刊行契約の直後、平成8年(1996)7月27日に唐突に閉じられましたが、この企画展を通して、若泉敬が人生をかけて何を希求し、いかに生きたかを紐解くことができれば幸いです。

若泉敬 略年譜

1930 福井県今立郡服間村横住に生まれる。
1944 服間国民学校高等科を卒業。
1949 福井師範学校本科男子部を卒業。
1954 東京大学法学部政治学科を卒業。
保安庁保安研修所に勤務。
1957 ロンドン大学(英国)大学院を修了。
1960 ジョンズ・ホプキンス大学(米国)高等国際問題研究所客員所員。
1966 京都産業大学世界問題研究所教授。
1970 同研究所所長。
1980 東京から鯖江市に転居。京都産業大学教養部教授。
1988 福井県に大地球儀を寄贈。
1992 京都産業大学を依願退職。
1994 『他策ナカリシヲ信ゼムト欲ス』出版。
1996 7月、鯖江市の自宅で死去。享年66。

服間尋常小学校卒業時

若かりし頃 海外出張先にて

岸信介元首相と

沖縄戦跡への鎮魂の旅

(1.975)
S.50年6月
ワシントン ウッドロー ウイルソン石碑
市 フエロー

福井県庁

791

評伝　若泉敬
——愛国の密使

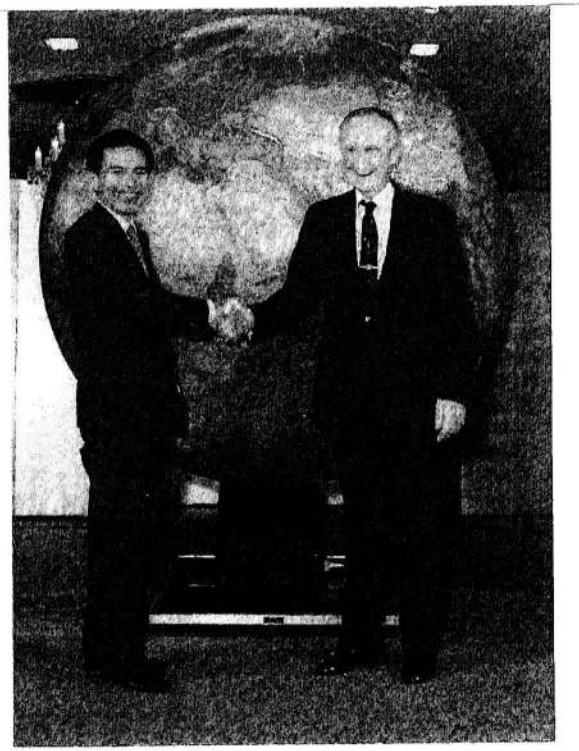
森田吉彦

評伝　若泉敬——愛の密使　森田吉彦　文春新書 791 ¥900

9784166607914
1920223009002
C0223 ¥900E
定価(本体900円＋税)

『他策ナカリシ〜』に書かれなかった新事実が明らかに

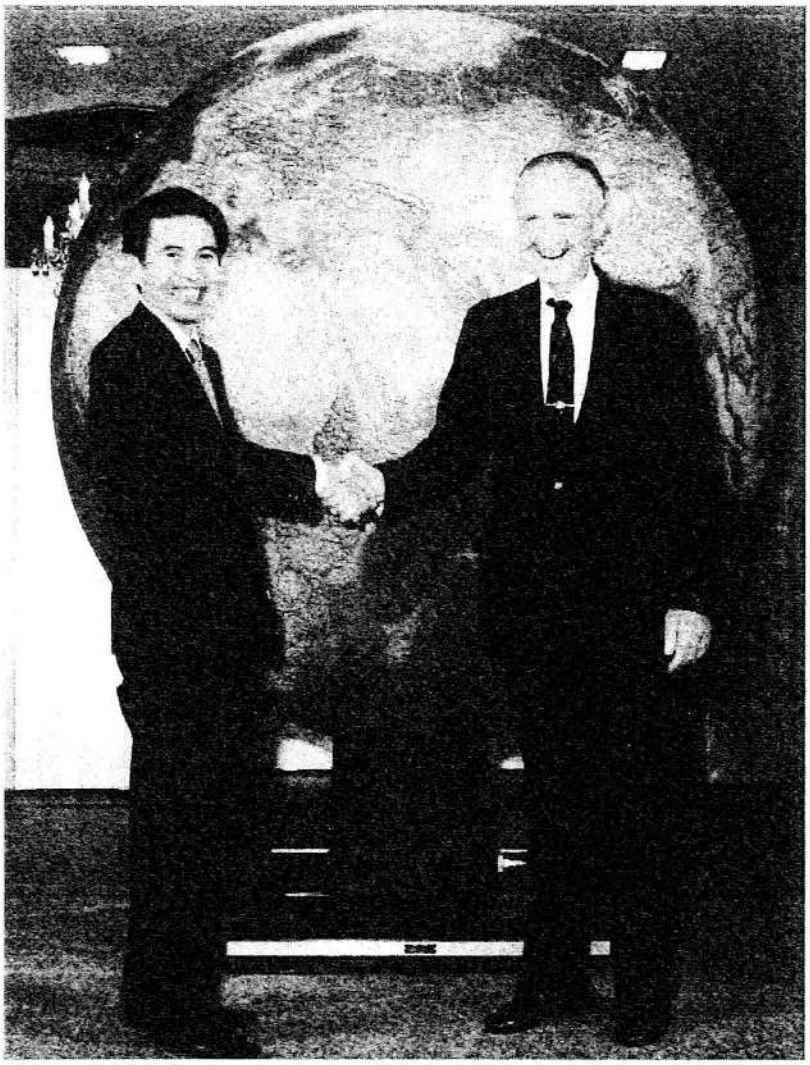
若泉敬が沖縄返還交渉で「密使」として活躍したあの時代、この国全体が無邪気な希望に満ちていた。——中西輝政



文藝春秋
定価(本体900円＋税)

沖縄返還交渉で大役

若泉　敬



若泉が特注し、福井県に寄贈した直径1・8メートルの巨大な地球儀（現在、県国際交流会館に設置）。鯖江市の自宅で行われた贈呈式には、旧知のマンスフィールド駐日米国大使も駆けつけた＝1988年9月28日（山岸豊治撮影）

「若泉敬君に会ふ。若い学者先生の情熱をこめてのキッシンジャー補佐官との取引きを、余亦（また）感激の中に報告をきく」。一九六九年十一月十五日、佐藤栄作首相は日記に記した。その六日後、訪米しニクソン大統領と会談した佐藤は、「七二年、核抜き・本土並み」の沖縄返還を発表した。国際政治学者だった若泉は、佐藤首相の密使として、米国との返還交渉に大役を果たした。それから四半世紀。若泉は重い沈黙を破り、緊急事態に際して、核兵器の再持ち込みを認める密約があったと著書で証言する。そこには、日本の現状を憂え「再独立の完成」を願うメッセージが込められていた。

る」との口実で大統領執務室に隣接した小部屋に入り、ニクソンとともに議事録にサインした。キッシンジャーと若泉が打ち合わせたシナリオ通り。その事実を知るのは全世界で四人だけだった。

役目を終えた若泉は同月二十九日、官邸を訪ねた。「どうも今度は、大変お世話になりました」と

晩年の吉田茂元首相に見込まれ、大磯の邸宅にしばしば招かれた＝1960年代半ば

若泉（わかいずみ）敬（けい）と沖縄返還交渉の歩み

1930（昭和5）　服間村横住に生まれる
1944　服間小高等科を卒業
1949　福井師範学校を卒業
1954　東大法学部政治学科を卒業
1957　防衛庁防衛研修所（現防衛研究所）の助手
1960　英国ロンドン大大学院を修了
　　米国ジョンズホプキンス大高等国際問題研究所客員所員
1961　防衛庁防衛研修所の教官
1966　京都産業大世界問題研究所教授
1969　中央教育審議会臨時委員。日米首脳会談で沖縄の「核抜き・本土並み」返還決定
1970　同大世界問題研究所所長
1971　沖縄返還協定調印
1972　沖縄の施政権返還（本土復帰）
1974　米国ウッドローウィルソン国際学術研究所所員
1980　京都産業大教養部教授。東京から鯖江市に転居
1988　福井県に大地球儀を寄贈
1992（平成4）　同大を依願退職
1994　「他策ナカリシヲ信ゼムト欲ス」出版
1996　同書の英訳完成。7月鯖江市の自宅で死去。66歳

若泉 敬 先生について

崇高な志を建てて人生を全うさせる、ということは将に至難のことであることは洋の東西を問わず歴史が辛くも物語っている。

その志の高さが高い程、実現の困難さが幾何級数的に大きくなり、そのことの為に地位や名誉や金などは言うに及ばず、命までも放棄するという矛盾に満ちた人生を送ることになることが多い。

そしてそういう人が居て、人間の社会や国家がまともな形になって行くものなのである。志を持つことは他の多数の犠牲になることなのだ。

若泉敬という人は崇高な志を持った現代日本の犠牲者であった。戦争で失った沖縄をテーブル交渉で返還に導く、ということは人類史上始めてのことであり、だから佐藤栄作総理はノーベル平和賞に輝いた。

しかしその至難の裏交渉の使命の裏には表に出せない問題も多くあったのであり、それらのことを全て若泉という個人の中に打ち伏せてしまおうと社会の表面から退いて鯖江に引き込んでしまった。

若泉敬という人の評価や、地位や報酬などは、沖縄を返還させるという大きな志の前には全く無意味のものであり、遺願であった太田海軍中将の遺文に報いようとする執念と、何よりも沖縄県民の実益を見ることで、充分だと思っておられたところがある。

しかし現実の推移は返還後の沖縄の問題や、何より日本という国家の衰退を憂えて「実は…」という文章を書かざるを得なくなり、迫りくる病魔と闘いながら国民に警鐘を鳴らす本の執筆にかかられる。

恐らく書かれた本は後世の歴史家が若泉敬という人を崇高な志をもった純粋の日本人として歴史に残すであろうし、志に殉じた昭和の橋本左内として評価されると信じて疑わない。

三十年前、福井ＪＣの顧問として迎え、その警咳に接し得たことは誠に仕合わせであった。

28.9.-8
[illegible]井[illegible]行

平成23年（2011年）2月20日（日曜日）福井新聞　朝刊
若泉敬先生の半生描くドラマ　総理の密使　記事

若泉敬の半生描く

あすドラマ「総理の密使」

「沖縄」「核実態」浮き彫り

沖縄返還に際し、佐藤栄作首相の密使として米側と「核密約」の交渉にあたった本県出身の国際政治学者、若泉敬の半生を描くドラマ「総理の密使～核密約42年目の真実」が21日午後9時からTBS系で放送される。関係者取材を基にしたドキュメンタリー部分も交え、戦後外交史の矛盾と、国家に翻弄された若泉の思いに迫る意欲作だ。

1960年代後半、佐藤首相（津川雅彦）の密使となった若泉（三上博史）は、ニクソン政権のキッシンジャー大統領補佐官と二人きりの交渉を続け、「有事の際の沖縄への核の再持ち込み」「日米繊維交渉での日本の譲歩」を条件にした返還の道筋をつける。

72年の返還の喜びもつかの間、待っていたのは繊維交渉の重圧と、返還後も基地の存在に苦しむ沖縄の現実。愛妻を病で失い、密約を暴露した著書も日本政府に「黙殺」された若泉は沖縄への祈りをささげ、遺骨収集に没頭する…。

番組は元米兵の証言、今回新たに発見した晩年の若泉の手帳などを基に、沖縄への核配備の実態や、常に島民の気持ちに寄り添い行動した高潔な民間人密使の姿を浮き彫りにする。島田喜広プロデューサーは「純粋さの一方、核をめぐる情勢の中で生き残る方策を考えるしたたかさも持ち合わせていた若泉氏の姿を通し、今の日本に問題提起をしたかった」と話している。

「総理の密使」の一場面。若泉敬を演じる三上博史（左）と佐藤栄作首相役の津川雅彦

フルトベングラーリマスター盤の全集を順次発売

ことし生誕125周年を迎えたドイツの指揮者フィルヘルム・フ

発売されている＝写真。

ベートーベンやブラ

300円）。常任指揮者を務めたベルリン・フィルハーモニー管弦楽団や、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団との演奏を収めた。ロンドンのアビイ・ロ

抜粋した2枚組みベスト盤「永遠のフルトヴェングラー」（EMI、2千円）も発売中。

第六代福井市　市長　永井環（大正十五年八月二十九日～昭和五年八月二十八日）
昭和五年十月発行「新日本の先駆者　日下部太郎」の中に歴史的事実の報告。
昭和二年グリフィス博士夫妻五十年ぶり来福。日下部記念碑に二十円提供。

永井環著

新日本の先駆者

日下部太郎

福井評論社發行

昭和五年九月三十日印刷
昭和五年十月五日發行

（非賣品）

著作兼發行者　東京市小石川區久堅町七四　永井環

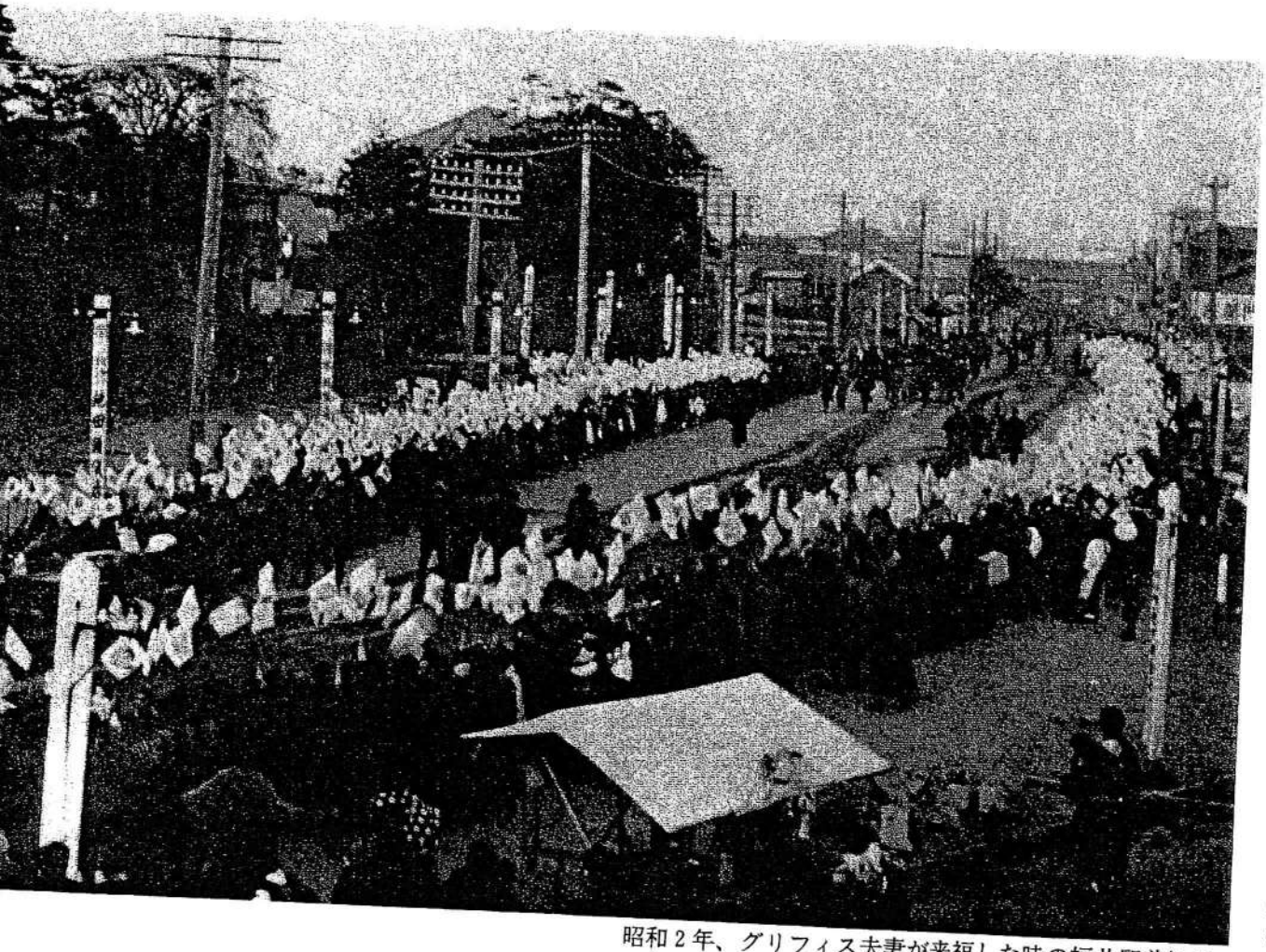
印刷者　福井市佐佐枝上町四十三番地　岡崎左喜介

印刷所　福井市佐佐枝上町四十三番地　岡崎印刷所

發行所　福井市佐久良下町二十七番地　福井評論社

6代目市長

年を迎えたドイツの指揮者ウィルヘルム・フ
団との演奏を収めた。
ロンドンのアビイ・ロ



昭和２年、グリフィス夫妻が来福した時の福井駅前歓迎

一月一日　グリフィスは県庁（福井市佐佳枝上町にあった）へ出かけ、相談してい

学校の授業。実験中、特別郵便で江戸から手紙の包みを受け取る。一通はフルベッキ氏からで、繰り返し（東京へ）来いとの誘い。村田へ手紙を書き、十四日（旧暦）に福井を離れたいと伝える。大岩が私の村田への手紙を持って帰る。一月二十三日に（一人でも）江戸行きを決心。たとえ妨害があっても。

上京を決心する

▲フルベッキからの再度の誘いで、グリフィスは心を決めた。村田氏寿知事に、福井を離れる決意を伝えるため、翌日の十七日、再び県庁を訪問、村田知事と一時間半もかけて話し合っている。知事もグリフィスの決心の堅さを知り、折れている。グリフィスは早速、引っ越しの準備にかかっている。グリフィスが大学南校の教授になるため福井を去ることを知った友人や教え子が、次々お別れに来る。なかには八木寿（日下部太郎の父）もいる。グリフィス最後の授業は二十日に行われている▼

◇同一月二十二日　月曜日◇

起床七時。朝食。出発の準備。村田が別れのあいさつに来る。生徒ら四十～五十人が三㌔私に同行。人夫と荷物が後に従う。雪が激し

掘ってやっと見つかんで、今宿の村で宿だ。夕食。疲れて寝

吹雪をつき出発

とうとうグリフィ
数日前から降り出し
続いているが、予定
この時のグリフィス
の教師でなく、日本
また、グリフィスは、
数多く居住する東京
ようすがわかる。福井
日で終わり、グリフィ
教授として全国から集
ることになる。

×　×

東京へ出たグリフィ
治七年七月ごろまで大
らに精神科学も教えて
神学学校に入学。牧師
そして昭和二年四月
は懐かしい福井へ再び
を福井を去って以来、
この時、グリフィスは
四月二十七日の福井新聞
県を聞いて駆けつけた教
京都中学校長）や佐々木
大理学博士らが出迎え、
また、グリフィスは福井
福井の生徒たちを前に講

S50年6月21日 8時58分発 白エゴで全員の見送りを受けて出発する調査員.

ラッドガース大学 表敬訪問

ラッドガース大学 ハークス副学長 S.50年6月

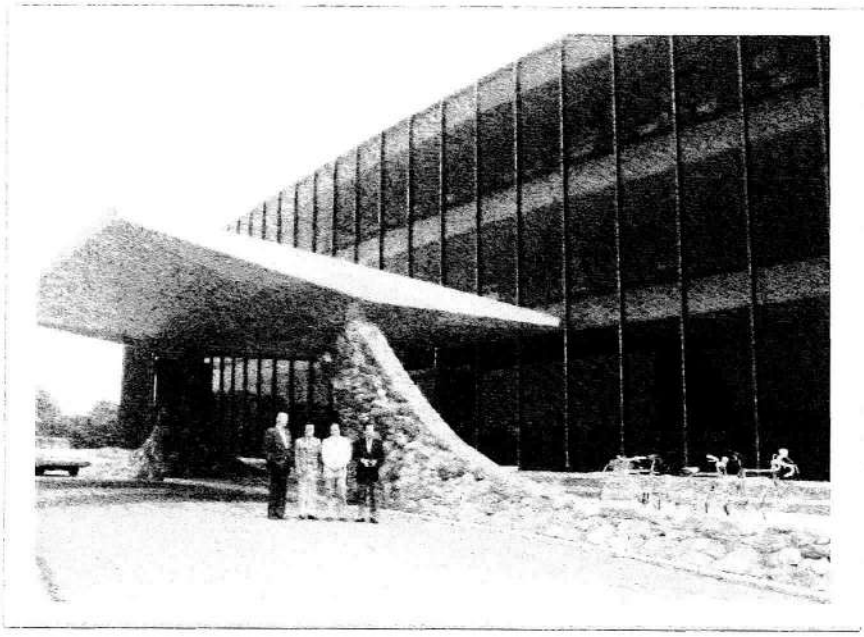
ラッドガース大学 リチャード ウィルソン S.50年6月

訪米に関する情報収集

・福井大学
・ロバート・フラーシャイム教授、
・ラドガース大学　副学長　バークス氏との親交。
・若泉敬先生
・佐伯氏（ＩＢＭ）
・児玉氏（東芝）
・酒生俊彦氏（国産飛行機ＹＳ-１１インテリア担当）
・小竹所長（ＪＴＢニューヨーク所長）
・松村正義氏（外交官、三国町出身）

昭和五十年六月二十一日から七月四日、調査団アメリカ合衆国訪問。
　ワシントン市ウッドロー・ウイルソン国際学術研究所訪問、フェロー　若泉敬先生訪問。

※上記、多国籍企業　ＩＢＭワトソン研究所
　視察年月日：一九七五年（昭和五十年）六月
　ニューヨーク市から四十八キロ、石造三階建、扇面形をしている中庭がイサム野口の設計による枯山水で、自由な空間という哲学があらわれる。世界より四百五十人の頭脳を集め日本から三人。ダイオードの発見者江崎玲於奈氏、阪大工学部結晶学の岡本氏、松下電器からプリンストン大学へ留学博士号を所得しＩＢＭに移った金子氏。江崎氏は、ＩＢＭでも数少ないフェローの一人である。
　今回のニューヨーク市訪問について酒井の身内の一人がたまたまＩＢＭ本社勤務の立場でおられ（上記、佐伯氏）協力してもらいました。
　一、ワトソン研究所視察訪問
　二、ニューヨーク市アストリアホテルからニューヨーク市ラドガース大学まで運転手ガイド付きリムジンカーの手配
　三、佐伯氏宅への訪問



←昭和五十年（一九七五年）六月
ＩＢＭ　ワトソン研究所　正面玄関

1975年6月 NY
佐伯邸にて

←佐伯氏宅へ訪問

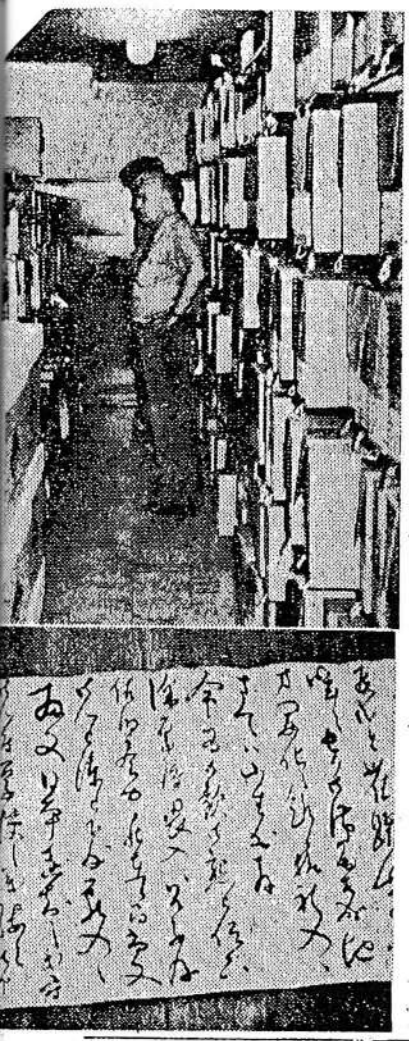
福井大 姉妹校ら計画 ラ大

幕末の忘れられた郷土の先覚者日下部太郎を調査、研究するため福井青年会議所（酒井誠行理事長）はこの程二週間にわたり、日下部太郎の留学先、米国ニュージャージー州の州立ラトガース大を訪問した。荒れ放題になっている日下部太郎の墓前で黙祷を弔い、向こうの大学関係者、市長や商工会議所の役員らと会い、墓地再建計画を話し合った。また、日下部や福井藩で敵べんをとったウイリアム・E・グリフィスを通じてつながりが深いラトガース大と福井大の姉妹大学提携の計画もかなり具体化するなど、貴重な日下部太郎の資料とともに、いろいろな土産話を持ち帰った。

米側が受け入れ

土産に貴重な資料

福井青年会議所
国の理事長ら帰



〈荒れた墓で供養〉
酒井理事長と加藤二副理事長

同会議所OBの堂下陽二さんの三人が、六月二十一日から七月四日まで渡米。ニューヨークから約百キロ離れたニュージャージー州ニューブランズウィック市にあるラトガース大学を訪問した。ダウンタウン（下町）に近いウィローグローブの森にある共同墓地を視察したが、四、五年前に、ブラックピープルや白人ラジカルの学生運動によって日本人留学生の墓も荒らされていた。日下部太郎と一緒に留学していた日本人留学生九人の墓のうち、八基が倒されており、その後、ほとんど手入れもなく荒れ放題だった。卒業を間近に控えて、不遇の死を遂げた郷土の先覚者の墓を前に、三人は思わず目頭を熱くし、墓前にひざまずいてその霊を慰めた。

〈日下部資料を持ち帰る〉

酒井理事長らは、同大アレキサンダー図書館にも出かけた。シンクレア図書館長の案内で資料を調べた。明治維新に福井藩に来ていたウイリアム・E・グリフィスの日記をはじめ、日下部太郎の動向を知る日本人留学生の膨大な資料が丹念にファイルされており、びっくりした。「当時の貴重な資料が山積みしてあり、ラ大で研究した方が、福井の近代史がよくわかるのではないか」と思わずうなったほど。

日下部太郎の顔写真と、略歴も卒業生一覧の中にファイルされていた。一八六七年（慶応三年）に藩名を受けて留学。数学と英語を学び、中でも数学は抜群の成績。天才的な数学者に授けられるフィ・ベタ・カッパ賞を受賞した記録などがあり、今さらながら、日下部太郎の偉大さを痛感。「忘れられた郷土の先覚者、日下部太郎の業績を再認識し、福井の未来を担う若者たちを啓発していこう」と決意を新たにした。膨大な資料の中から「日本人留学生の動向」と題した貴重な資料をはじめ、日下部やグリフィスに関する資料をどっさり持ち帰って来た。

〈墓地再建には協力も〉

滞在期間中、一行はリチャード・J・マクリーガン市長を表敬訪問。大武福井市長からのメッセージを渡した。荒地のジャック・ガスキン商工会議所会頭ら関係者とも懇談、墓地再建計画を話し合った。ニューブランズウィック市では、五年計画で都市再開発計画を進めており、墓地移転の話も出ている。

向こうも日本と同じく市は財政難。しかし計画が具体化した場合日本側の要望を出来る限り受け入れることを快く承諾してくれた。さらにラトガース大学側から「大学構内に日本人留学生の墓地を移してもよい」との申し出もあった。日米関係者の努力で、荒れた墓が再建される見通しもかなり明るくなった。

〈教授交換など提案〉

ラ大視察の目的はもう一つあった。福井大との姉妹大提携の話だった。一行は、アルダス・W・バークス副学長、リチャード・ウイルソン国際関係部長ら大学側の首脳陣に会った。滞米中、福井大学長の友好メッセージを渡す一方、懸案の姉妹大学提携計画を話し合った。日下部太郎やグリフィスを通じ、福井大とラトガース大学のつながりが深いことを双方が確認。バークス副学長（日米外交史専攻）が大の親日家で、福井にも非公式に二、三回訪れていることもあって、話は順調に進んだ。

姉妹大学を結ぶ前提として、ラトガース大側から①グリフィス資料、米国史の持ち出しなど図書、資料の交換②双方の教授交換。ラ大では、独身の教官を一年間受け入れると提案③夏休みを利用した交換留学生の実施④滞在費、学費の相互負担④交渉の窓口は、ラ側ではウイルソン国際関係部長が担当する―という提案がなされた。福井青年会議所では、早速福井大側に、米側の意向を伝えて、姉妹提携計画を今後、具体化していくことになった。

550年7月9日
福井新聞

550年6.21～7.4 調査視察
551年11月3日
顕彰除幕式
（青年会議所が作成して市へ寄贈する）
在日アメリカ大使
J.D.ホッドソン大使 夫妻
ラトガース大学
アルダス.バークス副学長 夫妻

昭和五十一年　アメリカ建国二百年　九月十七日アメリカ大使館（赤坂）（この年新築・初めて会った日本人）
若泉敬先生同行にて、J・D・ホッドソン駐日米大使を訪問。
十一月三日　福井での式典への招待状を持参し承諾をえました。

日下部太郎石碑建立　実行委員会

1. 予算及び資金計画.（３６０万～４００万）. 外部への資金調達及びバランス

2. タイムスケジュール

6月	特別委員会. 発展的解消 ——→ 実行委員会設立
7月14日	市. 小中学校校長会議出席　協力要請
8月　初旬	米国大使館への説明
8月　中旬	資金調達完了
8月　下旬	石碑発註
11月　3日	除幕式

3. 当日の諸行事は青年会議所が主導権をもつてやる事を原則とする

4. 組織及び職務分掌

5. 県. 市との折衝窓口及び援助（知事.市長.市教育長.部長.課長.県警本部. 市政週報）

6. 米国大使招聘に関する件　建国200年、日米修好120年、学術文化交流
   ㋑11月2～3日の予定か11月3～4日の予定か
   ㋺随行員　夫妻. 公使. 書記官. 警視庁. 通訳
   ㋩宿泊（芦原. 開花亭）
   ㋥県. 市の招待状

7. 式典のルール及び式次第（除幕式　日本流）

8. パーティ　（ＪＣと大使）夜か昼か　招待者　午餐会又は晩餐会

9. バークス氏招待状及び出迎え←——→福井大学（学長. 清水）

10. 大使の記者会見　到着日の出迎え

11. 内外記者団　AP. UP. New York Times

12. 日本. 越前色の濃いものを

13. 記念講演　文化会館　11月3日　午後4時より　1時間

14. 市立図書館の提供場所について

日下部太郎石碑建立　実行委員会　組織及び職務分掌

'76年度 理事長 <加藤一二>

実行委員長 <直前 酒井康行>

㋑日下部太郎石碑建立に関する'76年度事業の総轄
㋺実行副委員長との連絡調整
㋩全般的な企画・立案
㋥渉外に関する業務

顧問　若泉敬
知事・市長・会頭

総務室 前波

実行副委員長　27名（河合）

財務
- ㋑収入支出業務の一切
- ㋺事務局業務の一切
- ㋩記念誌発行
- ㋥バークス・ラドガース大学副学長接待
- ㋭その他

企画室・監事 内藤

実行副委員長　14名（川中）

式典
- ㋑除幕式　式典行事の一切
  会場設営、式典、司会進行、受付業務、コンパニオン
- ㋺その他

指導力開発室 中山

実行副委員長　58名（品川）

賛助事業
- ㋑報道関係一切の業務（PR）
- ㋺記念講演の一切（新しい日米関係について）
- ㋩招待者業務の一切
- ㋥Party業務の一切
- ㋭その他

社会開発室 横山

実行副委員長　17名（伊藤正）

米国大使
- ㋑米国大使　接待、渉外業務の一切
- ㋺交通業務の一切（輸送、配車　etc.）
- ㋩その他

国家問題室 石橋

実行副委員長　21名（開発）

総轄
- ㋑石碑建立　企画・発註・渉外・業務の一切
- ㋺作文コンクール
- ㋩資金問題（会員、OB、外部）
- ㋥ラドガース大学の資料
- ㋭福井大学、松平家への折衝
- ㋬アイ・ベーター・カッパー鍵
- ㋣その他

昭和五十一年十一月三日　日下部太郎顕彰事業　記念式典　除幕式、

秋晴れの美しい日であった。顕彰碑の除幕式は、ホッドソン駐日アメリカ大使閣下ご夫妻はじめ、内外からの多数の来賓の見守る中、作文コンクールに応募した入選者の手によって行われた。

現職のアメリカ大使が、地方の青年会議所の行事に参加するなど、前代未門のことであろう。たまたま、この事業計画が、日米友好の絆をテーマとしたものであったとしても、若泉敬先生のご努力なしには、到底実現されない快挙であったろう。

いかにも前もって書類で連絡はいいておるとはいえ、五分間という接見時間の中で、自分を紹介し、その経過と事業の目的を説明した上で、出欠の可能性について打診するなど、それも外国語を駆使しての交渉とくれば、これは最早お手上げであっても、われわれには、これをこなす知識も能力もない。

若泉敬先生とのわれわれの出会いは、一九六六年三月の例会の時からである。当時、先生は、文芸春秋にアメリカのジョンソン大統領、マクナマラ国防長官との単独会見を発表されたり、アメリカのテレビ番組に出演し、日米安全保障問題について、激しい討論を展開したりと、内外ともに注目を集める活躍を続けておられた。先生は、福井青年会議所に対して、主として国際政治を中心とした講義を根気よく続けておられた。若し今のわれわれに多少なりとも、他の青年会議所に較べて知的欲求に対する、いささかの先進性があるとすれば、それは、すべて先生のご指導の賜物であるといってよい。

去年ルーマニア政府から何故か知らぬが勲章をもらった時、中学生の同級生が中心となって祝賀パーティーが福井パレスホテルで開かれた時も青年会議所のみなさんにお祝いを言ってもらえるのが、わたしにとって一番の幸せだと漏らされるほどに、そのあつきあいは極めて親密である。

ホッドソン駐日アメリカ大使閣下の福井での予定作製の段階で、温厚な先生が珍しく立腹された。「わたしは、大使夫妻を、知事さんや教育長さんに会わせるだけのために、今回の御世話を買ってでたのではない。大使と青年会議所の会員が親しく話し合う。そしてそれをきっかけとして、日米友好の輪が大きく広がってゆくのでなければ、わたしの努力は、水の泡だ。若し、大使との交流の場所を用意できないなら、今回のことについての、わたしに対する一切のご招待をお断りしなければならない。」

人絹会館でのパーティーは、そんな経緯から用意されたものだ。そして楽しい一夕であった。大使御夫妻にとっても、また、出席した全参加者にとっても、先生の温情をしみじみと感じた。

た、出席した全参加者にとっても、先生の温情をしみじみと感じた。
先生と私たちには、一つの小さな約束がある。それは二十一世紀をみる会。というものを一緒に作りましょう。という約束なのだ。一九九九年十二月三十一日どこかの山寺の庫裡でも借りて、年越し蕎麦を食べ、除夜の鐘を聞きながら、一緒に明日の話でもしようじゃないか、ということだけである。
福井青年介護所は、二年前から日下部太郎顕彰事業に取り組みましたが、彼の日本を思う心、福井につくす心、その強烈な達成意欲を私たちは福井の若者をはじめ、全ての人に知っていただき、福井県民の誇りとして頂きたいのです。
本日「文化の日」に日下部太郎とグリフィス博士の日米の友情の絆を称え、百二十年にわたる日米修好の限りなき前途を願って、ホッドソン駐日米国大使閣下御夫妻、バークス、ラドガース大学副学長御夫妻をはじめ、この事業に御賛同いただきました方々の御臨席を得まして「堕涙碑」の除幕を行えますことは、会員四十名にとりまして、まことに感激にたえません。
福井青年会議所の日下部太郎顕彰事業は、本日がその第一歩でありまして、今後は、国際社会に広く拡げた公正な目と炎のように燃える青年の気概の養成に、全力を傾けます。関連事業として行っています作文コンクール、教養セミナー、タフティ・クラブは、次年度、引き継がれていますし、福井大学とラドガーズ大学の姉妹関係につきましても側面から応援を重ねたいと思います。御後援いただきました皆様には厚くお礼申しあげます。

小史千萬（昭和五十二年四月二十九日発行）
編集者　開発　聡
発行者　社団法人　福井青年会議所

日下部太郎顕彰碑除幕式計画

社団法人 福 揖 青 年 会 議 所
昭和51年10月28日
日下部太郎顕彰碑建立実行委員会

理 事 長　加 藤 一 二
実行委員長　酒 井 康 行

J．D．ホッドソン駐日米国大使来福日程

ホッドソン大使夫妻	2名	
グレイク補佐官	1名	
エインワース大阪総領事	1名	大阪より11：03雷鳥1号
若泉　敬夫妻	2名	
警　備	1名	勝又氏

11月3日　9：35着　小松空港　全日空751便
9：50発

11：00着　福井県庁　知事表敬訪問
11：25発　(21→1111)

11：30着　福井市役所　市長表敬訪問
11：50発　(22→0001)

12：00着　福井市立図書館　記念式典除幕式
13：20発　(26→5000)　12：20～13：20

13：30着　浜町　開花亭　市長招待午餐会
14：40発　(23→1009)

15：25着　永平寺
16：30発

道中にて坪川邸見学

17：30着　福井人絹会館　福井青年会議所
18：30発　(22→4040)　招待パーティ

エインワース大阪総領事
18：04（雷鳥10号）

19：05着　芦原　開花亭　知事招待夕食会
(0776→77→2525)

11月4日　9：50着　小松空港
10：10発

州立ラドガース大学（ＮＪ　ＵＳＡ）
副学長アーダスＷ　バークス博士夫妻日程

11月1日	11：22	福井着（京都より雷鳥2号） 福井駅出迎　ＪＣ役員。担当室
	13：30～15：00	知事。市長。商工会議所会頭表敬訪問
	15：30～18：00	歴史館。博物館見学
	18：00	福井ＪＣ有志夕食会（風琴亭） 26-5511
11月2日	8：30	県立藤島高校着
	8：40～9：40	講　演
	10：00～16：00	福井大学訪問
	18：00～	丹厳同於夕食会（36-2668） （ロバート　フラーシヤム）
11月3日	11：00	福井市立図書館着（湯茶接待）
	12：20	式典参列 以後大使同行
	21：00	芦原開花亭発　　福井パレスホテル
11月4日	午後　福井発	

賜　除幕式次第

11月3日（文化の日）　12：20～13：20

福井市立図書館　小公園

次　第

1. 開会の辞（司会：内藤　英語：開発）
1. 国歌吹奏（米国。日本）及び国旗掲揚
1. ＪＣソング吹奏及ＪＣ旗掲
1. 理事長挨拶
1. 実行委員長経過報告
1. 作文コンクール入賞者表彰
1. 除　幕　（米国大使。作文コンクール入賞者9名）
1. 駐日米国大使お言葉
1. ラドガース大学副学長挨拶
1. フアイ。ベーター。カツパーＫＥＹ伝達（バークス氏より理事長）
1. 来賓祝辞　（代表　福井県知事　中川平太夫）
1. 目録並びにＫＥＹ贈呈（理事長より市長へ）
1. 謝　辞　（福井市長　大武幸夫）
1. 閉会の辞

※注　当日はダークスーツ着用
　　平　服

記念式典での、ホッドソン駐日米国大使あいさつ

中川知事、大竹市長、清水学長、加藤理事長、バークス博士、福井県民の皆様。まず初めに、今日福井にお招き頂きました事に対し、皆様に心からお礼を申し上げます。東京での職務を逃れて、いわば「本当の日本」でしばしの時を過ごす機会を得ましたことを、とりわけ嬉しく思っております。わたしも妻も、福井の皆様方にお目にかかり、またこの地方のすばらしい景勝の地を訪れることを前から楽しみにしておりました。

この重要な式典に皆様とともに参列することを光栄に存じます。

一九七六年のこの年に駐日アメリカ大使の職にあるものとして、私は、日本でアメリカ建国二百年を祝う多種多様な催しが行われるのを、大きな喜びと満足感を持って注目してまいりました。私はすべてのアメリカ国民に代わって、皆様のご厚意や皆様がアメリカの歴史的祝典に心から参加してくださったことに対し、日本の多くの友人の皆様に感謝の意を表するものであります。私たちアメリカ人は、日本の二千年にわたる誇らしい歴史を持っておられる事を知って謙虚にならざるを得ませんが、それにもかかわらず、このアメリカ建国二百年にあたり皆様からのご支援や栄誉をいただきました事を深く感謝しております。

アメリカの二百年の歴史は、偉大な新しいフロンティアを開拓するパイオニア精神に満ち溢れた人々の物語でした。私たちアメリカ人は、こうした開拓者たちにアメリカ建国史の上で最高の名誉ある地位を与えていますが、私は、日本…とりわけ福井県…もまたM開拓者の勇気とビジョンを備えている人々の偉大な貢献を認めておられることを知って、嬉しく思っております。特に私は日本の顕彰式典が、聡明で、力強い、次の舞台に今や踊り出んとするような、福井青年会議所の若い人たちの手によって創意され、そして成就されたことを知り嬉しく思うと同時に日本の未来のリーダーシップは、疑いもない頼もしい、人たちの手に託されているのだと確信した次第であります。

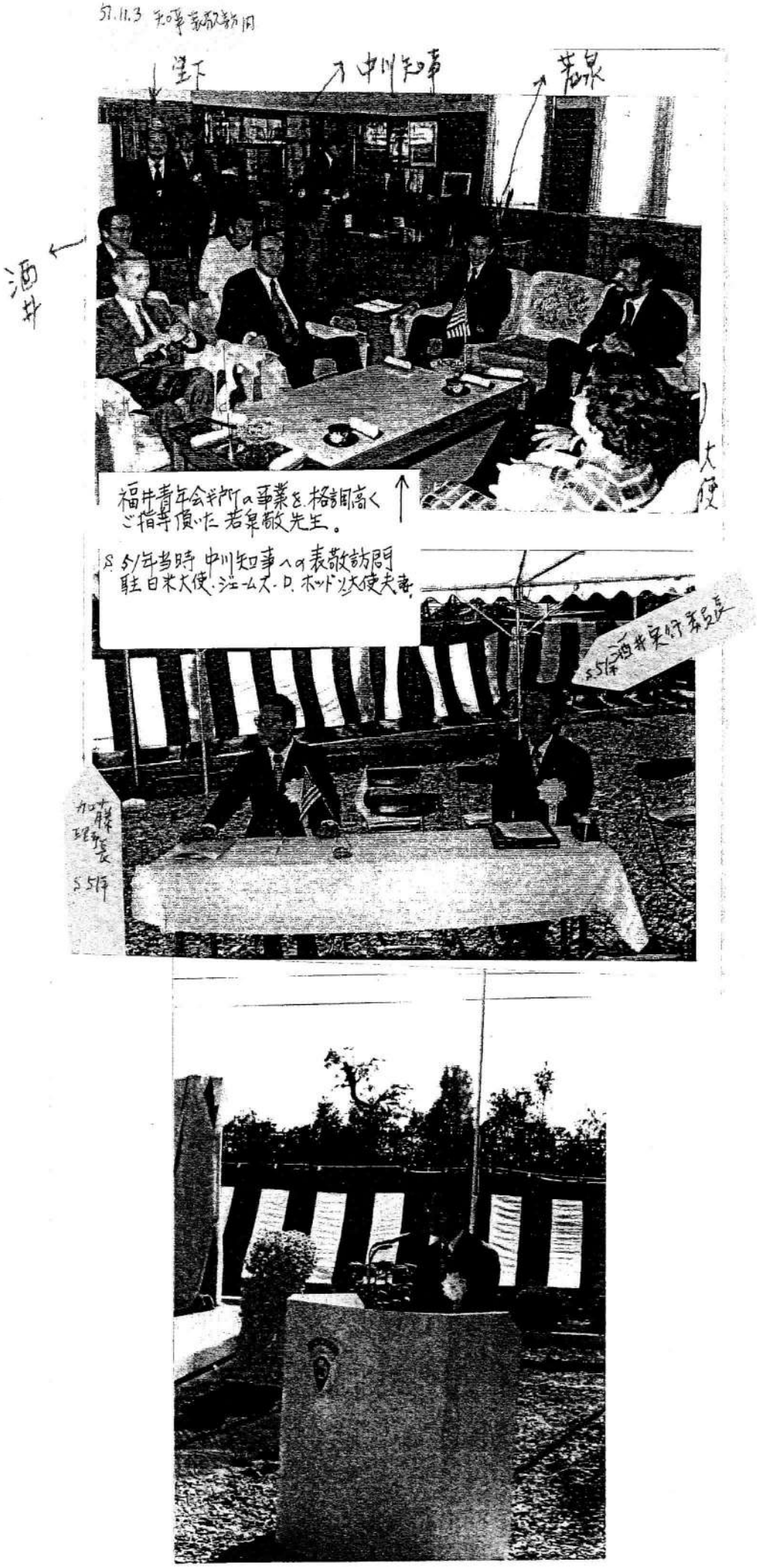
経歴が著しく異なる日下部太郎氏とウイリアム・グリフィス博士は、最も崇高な意味で先駆者でした。太平洋の両岸の互いに大いに異なる世界を探求し、架け橋をかけよとした二人の相互の努力は長く記憶され、大いに讃えられるに値します。

二人がその冒険の影響、つまり今日何千人もの日米両国の学生が太平洋を飛んで行き来し、絶えまない国際交流の流れを形づくっているという事実を知ったならば、どんなに驚くことでしょう。

日下部さんとグリフィス博士に讃える我々は、とりもなおさず、二人の信念とビジョンを讃えているのです。二人は広範

な個人的接触を行い、相互の文化を真剣に研究することが、平和で繁栄する世界の利益に最も叶うことを知っていました。

私は、今日この二人の先駆者を讃えることこそ、福井が日米友好百二十年を祝いアメリカ建国二百年祭を祝うのに最もふさわしい方々だと思っております。



永平寺参拝
若泉敬&大使
11/3
15:30

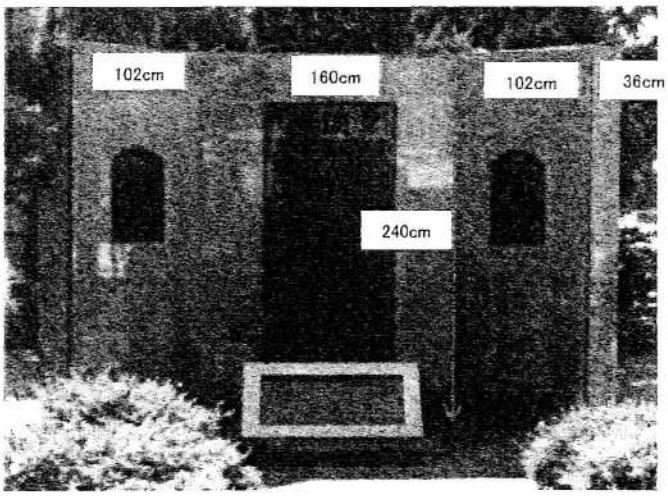
小松空港
昭和41年11月3日
J.D.ホッドソン駐日米大使
9:50am

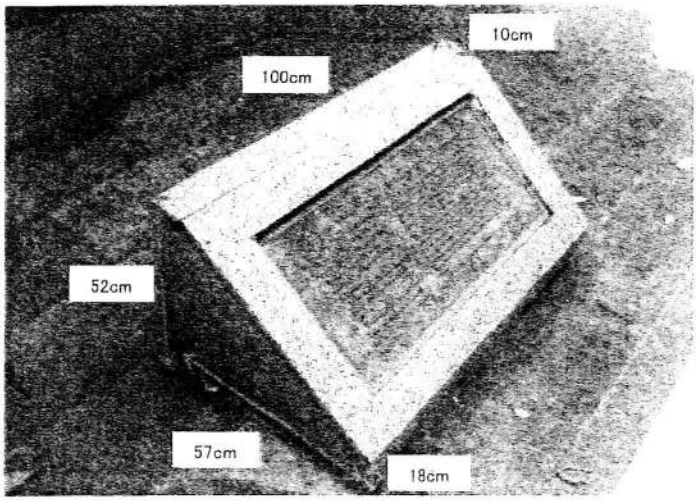
堕涙碑建立（我が国最初の米国留学生・日下部太郎）昭和三十三年卒　酒井康行

今を去る百三十七年（慶応三年）のこと、我が国の歴史が大きく変えられようとする幕末、国の将来を胸に膨らませ、藩主松平春嶽から改名するよう勧められた、日下部太郎（旧姓　八木八十八）は、二月十三日長崎を出港して三月十七日ジャワ到着、四月二十二日ジャワ出帆、七月十三日ニューヨーク着。百五十日間もかかり、蘭学より英語を選び、ニュージャージ州、ニューブランズウイック市　州立ラドガース大学（創立一七七六年）に入学するのであります。いかに決死的仕事ではなかったか。キングオブカレッジをコロンビア大学と呼ぶなら、ラドガース大学はクイーンオブカレッジである。寸暇を惜しんで学問に身を投じ、私欲を捨て、ついには並みいるアメリカ人学生を差し置いて、ファイ・ベータ・カッパー賞を受賞するに至ったのでありますが、残念な事に結核に倒れ黄泉の客となってしまった。当時松平春嶽も儒者として有名だった吉田東篁も異国での彼の訃報に接し死を悼む言葉を連綿と綴る堕涙碑を明治六年に書き残した。一八七〇年に彼の大学先輩であった、ウイリアム・E・グリフィスは、「日下部のような秀才を生んだ福井藩のためなら」と藩校明道館にて「お雇い外国人」当時二十九歳俸給三〇〇円として福井の教育に貢献され、東京大学の前身、開成校設立の為福井を去り、昭和二年五十年振りに再び福井へ夫妻で来福された折、福井中学生・学生・市民こぞって星条旗をふって盛大な歓迎式が行われた。当時六代目永井環福井市長にグリフィス夫妻は、日下部記念碑のため、二十円渡されたが、市長個人的理由と第二次世界大戦と云う不幸な出来事のため、昭和五十年迄忘れられていました。当時理事長の立場にありました私は、ラドガース大学訪問後、大武市長に要請し、関係当局に働きかけ、昭和五十一年十一月三日（文化の日）又米国建国二百年の記念すべき年に文京地区の市立図書館の公園内に、駐日米大使J・D・ホッドソン夫妻、中川知事、大武市長ご臨席のもと堕涙碑の顕彰除幕式を取り行いました。石碑の設計施工は青年会議所、二人の人物デザインは雨田光平作にて、福井市へ寄贈したのであります。昭和五十年十一月二日藤島高校にてバークス博士の講演会実施、昭和五十五年九月はマンスフイールド駐日米大使が堕涙碑を見学されました。青年会議所は福井大学とラドガース大学との姉妹締結、福井市とNB市との姉妹締結の提言を行い、そのとおりとなり、既に二十周年の時が過ぎました。藩校明道館で秀才のほまれ高かった一留学生の行動が如何に多くのことを日米両国に波及したことか、教育は人を造り、国を造ると云う理念で若者に希望を与え、若者をして未来の国造りの主人にさせるような教育環境が母校にはあったことを忘れないで更なる二百年に向かって発展して下さい。

当時社団法人福井青年会議所顧問でありました、若泉敬先生には強度のため、若者のために大変なるご尽力を頂いたこと忘れられません。

福井県立藤島高等学校　創立百五十周年記念誌より





是ヨリ先キ、明治三年三月十三日、我ガ留學生日下部太郎、米利堅合衆國ニ病死セリ。生姓ハ八木、日下部ハ其ノ本姓、初メ八十八ト稱セリ、本縣福井ノ人、世々舊藩ニ仕ヘ士族タリキ。生幼ニシテ穎敏好ンデ書ヲ讀ミ、略々大義ニ通ゼリ、成童ノ比ヒ忽チ以爲ク文武ハ偏廢ス可ラザル也ト、是レヨリ並セテ武技ヲ講ゼリ、志義烈ニ在リ。時ニ幕命藩人ノ洋行シテ學ニ就クコトヲ許セリ。藩因リテ生ヲ適セリ。蓋シ生學ヲ好ミ、且ツ傍ラ洋字ヲ讀ムコトヲ解セリ。故ニ此ノ選ニ與カリシナリ。是ニ於テ生慨然其ノ父ニ辭シテ曰ヘリ。「此の部分は既に前に出したから省略する」卽チ本姓ニ復シ、太郎ト改稱シ、直チニ我ガ横濱港ヲ發セリ。實ニ慶應三年三月十五日ナリ。已ニシテ彼ノ國ニ到ルヤ、新日爾塞、新不倫瑞克ノ地ニ就キ其ノ小學校ニ入テ、業ヲ某氏ニ受ケ、纔ニ歲ヲ閱テ遂ニ彼ノ謂ハユル拉多牙大學ニ登レリ、其ノ進歩ノ速ナル、彼ノ邦人ノ驚嘆スル所ト爲ルニ至レリ。事聞エテ會々我ガ王政維新、朝議其ノ資費ヲ給セリ。蓋シ生ノ學ニ就クヤ、夙夜激勵、祁寒暑雨、未ダ嘗テ頃刻モ業ヲ廢セザリシガ、是ニ於テ益々其ノ志ヲ責メ、幾ド寢食ヲ忘レタリ。乃チ以テ病ヲ成スニ至リシヤ、臥シテ猶ホ卷ヲ手ニセリ。人或ハ之ヲ諫止セシモ、生固ク可カザリキ。尋デ病大ニ發シテ終ニ起タザリキ、悲イカナ。生弘化二年六月六日ヲ以テ生レタリ、享年二十有六。是ニ於テ生ト與ニ彼ノ地ニ留學セシ者、杉浦弘藏、伊勢佐太郎等、與ニ共ニ相謀リ、彼ノ地ニ就テ以テ之ヲ葬埋シ、而シテ其ノ墓地ノ寫眞及ビ生ガ彼所ニ在テ看讀セシ洋書數百卷ヲ並セテ以テ之ヲ歸送セリ。此時會々舊藩諸ヲ彼國ニ請ヒ、其ノ學師一員ヲ遣ハシ、以テ藩內ニ來教セシム。彼國乃チ額力井斯ヲ差セリ、生彼ノ學ニ於テ、之ニ兄事セシ者、故ヲ以テ其ノ詳ヲ悉セリ。且ツ額力非斯ノ來ルヤ、金章一枚ヲ持チ、以テ之ヲ生ガ家ニ寄セリ。蓋シ彼國ノ命章ニシテ、之ヲ得シ者恒ニ前衿ニ施シ、以テ得業ノ證ト爲シ、其ノ同盟ノ國ニ於テ、咸ナ以テ之ヲ教官ニ列ス。生ノ學ニ於ケル、級次當ニ以テ之ヲ得ベクシテ會々病テ死セリ。故ニ國命贈ル所ト云フ、嗚呼生留學僅ニ四年、其ノ成業此ニ至レリ。如シ之ニ年ヲ假シテ、以テ其ノ學ブ所ヲ終ヘシメバ、其レ必ラズ國ト與ニ輝ク者アラン。然ラバ則チ生ノ死ヤ、豈特生ノ不幸ノミナランヤ。生ノ乃父名ハ某米齊ト號ス、予ト固ヨリ善シ、一日予ニ請ヲ爲シテ曰ク、兒已ニ異邦ニ死シ又タ之ヲ異土ニ委ス、父子ノ情之ヲ措クニ忍ビズ、之ガ爲メ石ヲ先人ノ墓側ニ建テ、以テ之ガ表ト爲サント欲ス、先生幸ニ其ノ一二ヲ誌セト。予何ゾ辭ス可シ。然レドモ生ハ我國生徒洋行留學ノ初メニ方ツテ、苦學以テ身ヲ致セリ、則チ特リ我國ノミナラズ、其ノ名已ニ各國ニ施ケリ、予復タ何ヲカ言ンヤ。顧フニ今朝廷南校ヲ創立シ、施イテ各縣ニ及ボシ、皆ナ之ガ學ヲ設ケテ以テ洋書ヲ講ゼシム。然レドモ學者概ネ利祿ノ爲メニシテ其ノ志ヲ立ツルコト生ノ如キ者、天下幾人カ有ル。是レ豈朝廷ノ意ナランヤ。因テ、今之ガ爲メニ其ノ苦學死ヲ致シ、所以ノ意ヲ概序セリ。庶幾クハ世ノ洋書ヲ講ズル者ヲシテ、感發興起以テ其ノ遺志ヲ繼述セシメ、上ハ以テ朝廷學ヲ起スノ意ニ副ヒ、下ハ亦タ生ガ數千里外ノ異土ノ中ニ在テ、喜ンデ以テ瞑センコトヲ、因テ以テ之ガ表ト爲スト云フ。

明治六年七月

敦賀縣隱士東篁山守篤撰

服部庸胤謹書

THE NEW YORK TIMES, WEDNESDAY OCTOBER 19, 1977

NEW JERSEY PAGES

000023
N.J.L.

NEW JERSEY

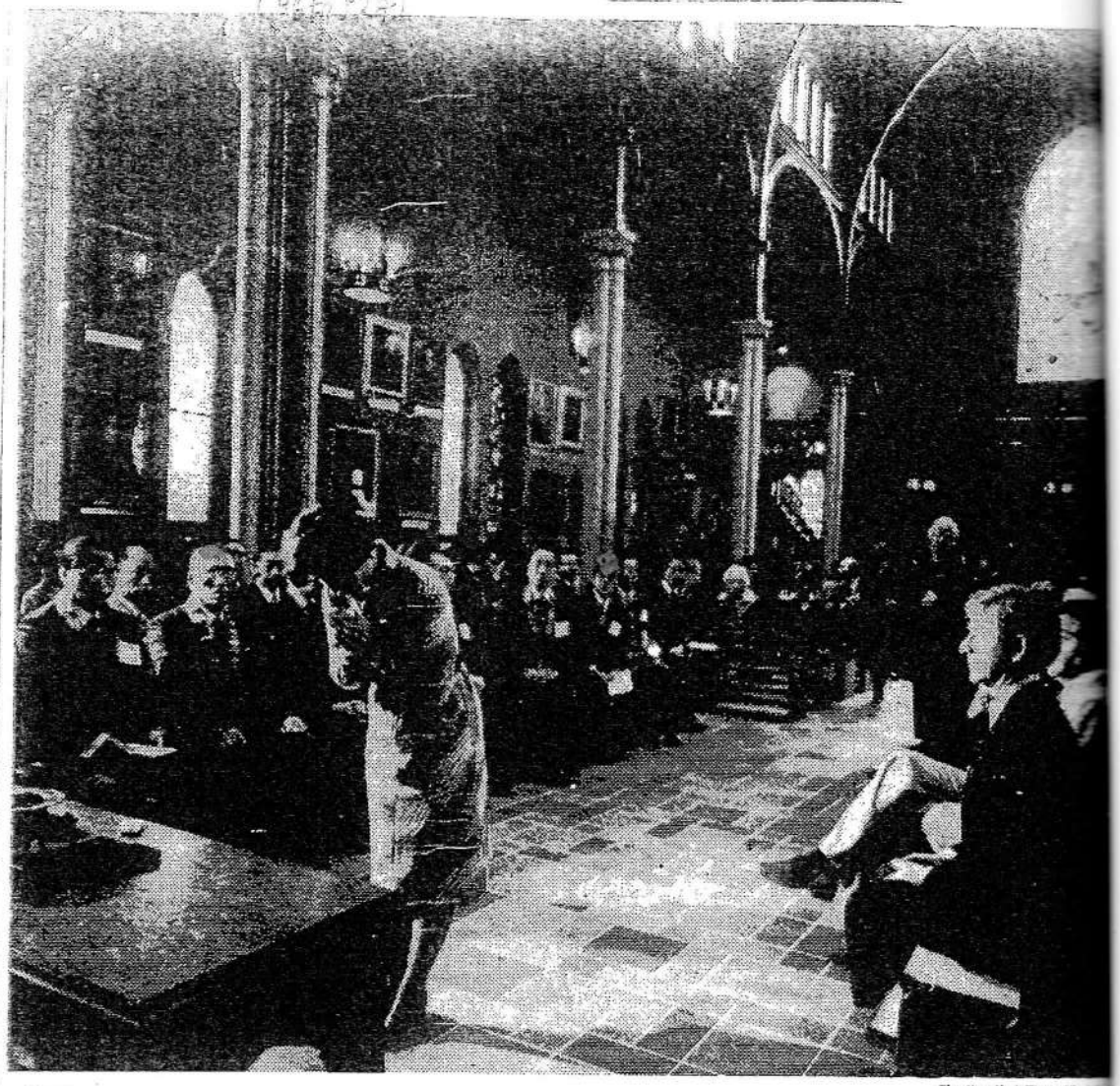
Issues County

and '75. His loss to Emil Olszowy, broker from Pas- crats' domination ats in the Legisla-

dion, Mr. Olszowy recovery plan of teman, the Repub- didate, to replace ome tax revenue. enator Bateman's the state's sales lollar if the Bate- ections fail short. e Democrats had tations to debate mates, Herman dent and head of y who is running hony DePasquale, who is a high t Paterson. ssemblyman Bate ing mate for the bieri, who served an in Little Falls, n the campaign. eation, primarily, te environmental ds that have thus of a new sewage 14th's four subur- e Falls, Totowa, ion. s in each of those and overutilized, nstruction of any than one-story by mistake. Re- ending the con- up jobs for the industry in Pas- says. s for the 34th's hn L. Salek of the Tax Revolt Phillip Martini of No Income Tax

personality con- and Mr. Fonta- t Senate race is npaign issues and They are running vacated by the venport, a one-

at he calls an heme, Mr. Fonta- rson lawyer, re- Graves was con- dminstration in t of Director of s Division, but adfailed to pass estigation. lies Mr. Graves, or from 1961 to ouncil President npeachable. If I I'm not knowl- ctly Fontanella's his miserable Assemblyman



The New York Times/Carl T.

19TH-CENTURY JAPANESE STUDENTS HONORED AT RUTGERS: Edward J. Bloustein, right, university president, and Yukio Otake, left, Mayor of Fukui, observing an offering of incense during a Buddhist ceremony at Kirkpatrick Chapel yesterday. The occasion was the honoring of eight Japanese students who died while studying at Rutgers in the late 1800's. The most n of the students, Kusakabe Taro, of Fukui, was th Japanese student to be awarded a Phi Beta Kapp deaths of the students are attributed to a vari reasons, from lack of acclimatization to overwor Taro died of tuberculosis a month before his grad

New Jersey Briefs

Bayonne Mother Dies Of Shooting Wounds

Rosemarie DiPrima died in Bayonne Hospital yesterday of wounds inflicted when her three children were shot and killed in the family's apartment at 45 East 13th Street in Bayonne. Mrs. DePrima was shot once in the head with a 45-caliber handgun and never recovered.

Ronald Nelinson, an East Orange attorney who is the father's lawyer, told the court the child was a witness to the incident involving the baby sitter and could prove her father to be innocent. The names of both the family and the baby sitter were not made public.

According to court records, the 16-year-old sitter charged the father tried to clear her father of charges of trying to rape a baby sitter.

ATLANTIC CITY GE A POWER-PLAN GR

Single Energy Source Is Em for Casinos, Housing and T

Special to The New York Times

PHILADELPHIA, Oct. 18—M seph Lazarow of Atlantic City sa that the Federal Government

1977年（昭和52年）10月19日（水曜日）ニューヨークタイムズ・ニュージャージー版掲載

昭和五十二年　ラドガー大学へ日下部太郎百年忌。合同慰霊祭
大武福井市長、市橋福井商工会議所会頭　参列。
特別会員　堂下健二　著
Fukui, New Jersey Day Oct 18. 1977　(昭和五十二年)
「夫人間の浮生なる相をつらづら観ずるに、凡そ儚きものはこの世の始中終、幻の如くなる一期なり、されば未だ万歳の人身を受けたりという事を聞かず…」
ニューヨーク西本願寺宣教院開法善師の重く厳かに響く蓮如上人の御文集が、英語に翻訳されて Kirkpatrick Chapel の建物にこだました時、ニュージャージの秋空は澄み渡っていた。
グリフィス博士が八十年前この教会で三時間にもわたる「日本に於けるラドガース大学卒業生達」と題する演説を行ったと伝えられるこの伝統ある教会の祭壇に、黒白の幕を張り十字架とマリア像を隠し中央に日下部太郎の遺影を飾り仏式の焼香台と法名札を立て、右横に鐘を前にして関導師が法衣をまとって座し左横にはキリスト教の大きな法衣をまとった Robert J. Tanksley 牧師が立っている。
エドワード、ブロースタイン、ラドガーズ大学総長、バイリーンN・J知事代理、リチャード、マリガン、ニューブランズウイック市長、バークス副学長らを始め 170 名に渡る米人参列者たちを前に、高橋ニューヨーク総領事、大武福井市長、市橋会頭ら日本側十数名が並ぶ中を関導師の御文集が続く。
「我や先人や先、今日とも知らず明日とも知らず遅れ先立つ人はもとのしずく末の露よりも茂しと言えり、されば…」米人たちの姿勢が次第に関導師の方に向けられ、組まれた足が降ろされ惹き疲れたように背筋が伸びていた。中には一人大きくうなずく者も居て彼なりに一様の理解を示している。「朝には紅顔有りて夕には白骨となれる身なり…」私には百年を超えて遠くのこの地で日下部と朗氏の供養を行うことのできる歴史的瞬間を噛みしめる感激よりも先に、四百年も前に蓮如上人が北陸の農民をして戦国大名に互する勢力までに育てた仏教の真髄が、時を経て場所を異にし全くの異人たちの前に同じような感動を呼び起こしている姿に唖然とした。

キリスト教の教会で阿弥陀経の読経を聞き、線香を焚きながら御文集を朗読する奇異さの中で全ては何お淀みもなく流れていった。「すなわち二つのまなこたちまちに閉じ一つの息長く絶えぬれば、紅顔虚しく変じて桃李の装いを失いぬる時は六親けん屈集まりて嘆き悲しめども更にその甲斐あるべからず…」

私には日下部太郎氏の悲劇は、日本人として、福井の人間として永遠に忘れてはならないことではあるが、そのことよりも前に、その事を超越して一つの学ばねばならない事があるような気がして計らずも目に熱いものが溢れてくるのをとめる事が出来なかった。ジーパンをはいた長髪の学生が歩み出てぎこちない手つきで香をつまみ両手を組んで目をつむっている。彼なりに百年以前の日本人留学生を偲んでいるのだろうか。自発的に参列してきている彼らの心には私は深く頭を下げた。見ると大武市長も手を合わせ彼らに目礼をされておられるようだった。

約一時間二十分の法要ではあったが、握手をし合ったアメリカ人はことごとく「素晴らしい式典だった」と称賛を惜しまなかった。高橋総領事は「長い外交官生活の中で今日ほど感激した日はなかった」と私の手を握りながら語ってくれた。私は真っ先に関法善導師の所へ行き感謝の言葉を言いながらアメリカでの不況の苦労を慰めた。

福井から持参のおみあげ　大武市長より
写真中央　ブロンスタイン　州立ラドガース大学　学長
写真中央左手　堂下氏
写真右奥　酒井康行

合同慰霊祭（日下部太郎百年忌）資料編

A SERVICE OF REMEMBRANCE AND DEDICATION （記憶と献身のサービス）

Rutgers-The State University of New Jersey（ニュージャージー州立　ラドガース大学）

Kirkpatrick Chapel（カークパトリックス　チャペル）

October 18, 1977　（一九七七年・昭和五十二年十月十八日）

THE SERVICE（サービス）

Invocation by Reverend Robert J. Tanksley（尊いロバート J. Tanksley による呼出し）

NEW JERSEY AND FUKUI（ニュージャージーと福井）

Greetings from DR. Edward J Bloustein, President of Rutgers-The State University of New Jersey
エドワード J ブロースタイン博士（ニュージャージーの州立ラドガーズ大学総長）からの挨拶

Message from the Governor of New Jersey ニュージャージー州の州知事からのメッセージ

Proclamation（宣言）

Message from the Consul General of Japan, New York 日本、ニューヨークの総領事からのメッセージ

Remarks by Professor Ardath W. Burks アーダス W. Burks 教授による意見

Remarks by Dr. Howard G. Hageman, President of New Brunswick Theological Seminary
（ハワード G. Hageman 博士、ニューブランズウィック神学的神学校の大統領による意見）

THE BUDDHIST CEREMONY（仏教の式典）

Gong（点鐘）

Shibjo（Sutra Chanting）（経典唱和）

Amida Kyo（Incense Offering）阿弥陀経（香提供物）

Sermon by Reverend Honzen Seki Reading of Scriptures（関法善導師による説教）

Presenttation by Dr. Yukio Otake, Mayor of Fukui（大武福井市長からのごあいさつ）

CITIES OF NEW BRUNSWICK AND FUKUI（ニューブランズウィックと福井市）

A SERVICE

OF

REMEMBRANCE AND DEDICATION

Rutgers–The State University of New Jersey

Kirkpatrick Chapel

October 18, 1977

THE SERVICE

Invocation by Reverend Robert J. Tanksley

NEW JERSEY AND FUKUI

Greetings from Dr. Edward J.Bloustein, President
of Rutgers–The State University of New Jersey
Message from the Governor of New Jersey
Proclamation
Message from the Consul General of Japan, New York
Remarks by Professor Ardath W. Burks
Remarks by Dr. Howard G. Hageman, President
of New Brunswick Theological Seminary

THE BUDDHIST CEREMONY

Gong
Shibujo (Sutra Chanting)
Amida Kyo (Incense Offering)
Sermon by Reverend Honzen Seki
Reading of Scriptures
Presentation by Dr. Yukio Otake, Mayor of Fukui

CITIES OF NEW BRUNSWICK AND FUKUI

Message from the Honorable Richard J. Mulligan,
Mayor of City of New Brunswick
Proclamation
Graphic Display of Restored Willow Grove Cemetery
Words of Appreciation from Representatives from Japan

Benediction by Reverend Honzen Seki

Message from the Honorable Richard J. Mulligan, Mayor of City of New Brunswick Proclamation
(リチャード J. Mulligan からのメッセージ、ニューブランズウィック宣言の都市の市長)
Graphic Display of Restored Willow Grove Cemetery Words of Appreciation from Representatives from Japan
(日本からの担当者からの理解の復元されたウィローグローブ墓地言葉のグラフィックディスプレイ)
Benediction by Reverend Honzen Seki (関法善導師による祝福)

昭和55年（一九八〇）九月九日～十日　マンスフィールド米国大使来福

昭和55年(1980)9月9日～10日.

駐日米大使夫妻ら
きょう来福
福井青年会議所が招く

マンスフィールド米国大使夫妻は九日、福井青年会議所（畑中篤理事長）の招きで来福する。十日までの二日間、福井市に滞在し、中川知事や大武福井市長を表敬訪問するほか、福井市立図書館横にある日下部ゲリフィス記念碑を見学、十日正午からは福井青年会議所代表者と懇談する。

マンスフィールド駐日米大使

大使一行は、夫人のモーリンさん、大使アシスタントのアロイシアス・M・オニール氏、ヒュー・H・ハラ名古屋アメリカンセンター館長ら六人。九日午後、国鉄福井駅に着いた後、中川知事と大武市長をそれぞれ表敬訪問。夜には知事招待の夕食会に出席する。

十日は午前中、鯖江市の若泉敬京都産業大教授を自宅に訪問。この後、大使がかねてから高い関心を示していたという日下部太郎にゆかりのある、日下部ゲリフィス記念碑を見学する。午後には二時間をかけて福井青年会議所の畑中理事長ら八人の代表と懇談会に出席。二時過ぎに福井を離れる。

マンスフィールド大使の来福は福井青年会議所が建てた日下部ゲリフィス記念碑に大使が興味を持ち、福井の若手経営者の集まりである同会議所のメンバーと交流を持ちたいという希望から実現。同会議所の代表者たちは経済問題や世界における日本の役割など、幅広いテーマで懇談することにしている。

昭和五十六年　福井大学とラドガー大学姉妹大学提携
昭和五十七年　福井市とニューブランズウイック市姉妹都市提携
昭和五十七年　ラドガーズ大学元副学長　バークス博士来福。

海越えた交流さらに

バークス博士（ラトガーズ大元副学長）来福

福井青年会議所の代表と再会を喜び合う博士夫妻

福井青年会議所メンバーと懇談

福井市と米国ニューブランズウィック市との姉妹都市提携後、初めて来福したラトガーズ大元副学長、アーダス・W・バークス博士は三日、福井青年会議所のメンバーたちと和やかに懇談した。この中で同博士は、若い力は素晴らしい。今後も両都市の交流をさらに深め、固いきずなを築き上げていってほしいーなどと激励、十日間の滞在日程を終えた。同博士は四日、福井を離れる。

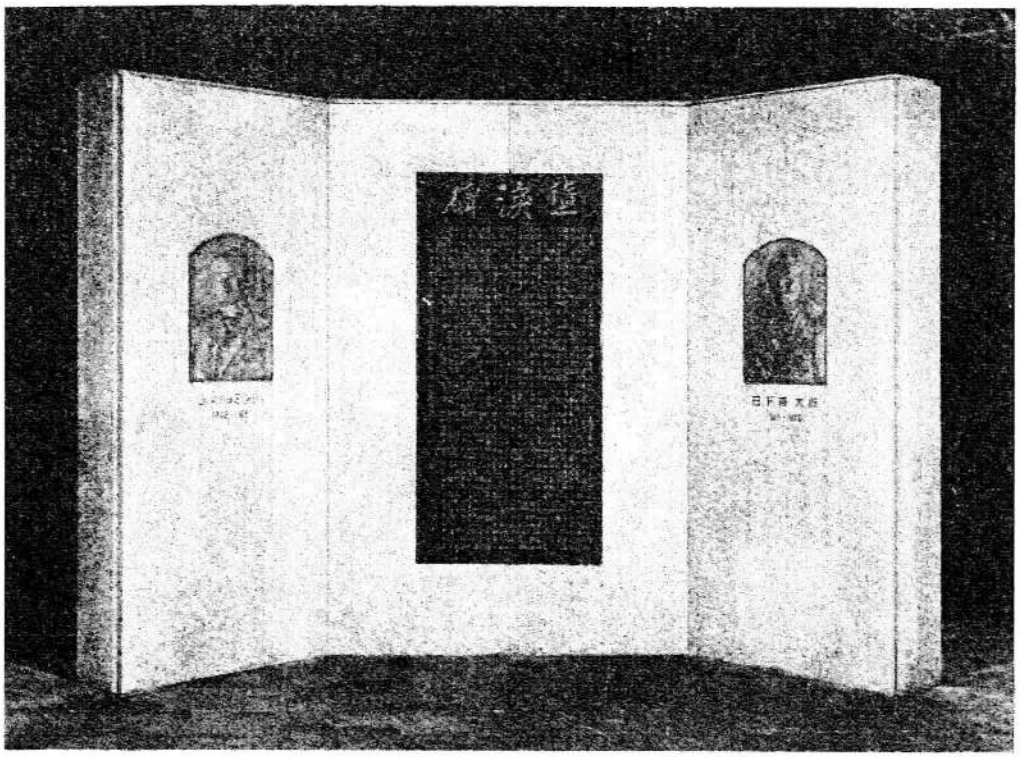
この日、同博士と福井青年会議所のメンバーが再会したのは福井市立図書館の敷地内に立つ日下部太郎顕彰碑前。この碑は五十一年十一月三日、同博士夫妻らを招き除幕式を行っており、両者の再会は実に六年ぶり。同青年会議所はその後、代表団をニューブランズウィック市に派遣するなど、両都市姉妹提携の重要な橋渡し役を担い、博士とも交流を続けてきた。

午前十時から同図書館で交流会が行われた。博士は本県ともゆかりの深いW・E・グリフィス（元ラトガーズ大教官）の研究で知られる親日家。グリフィスとは師弟関係だった福井藩の留学生、日下部にも興味を示し、戦後は今回を含めて六度も福井を訪れ、並々ならぬ研究意欲を見せてきた。

交流会では、当時のラトガーズ大の生活風景や学生の勉学態度などを紹介しながら、日下部の人となりをしのび「これを縁に両都市とさらにラトガーズ大、福井大が教育、文化の面で交流が深められるなら、こんな素晴らしいことはない。時代を担う若い力に期待しています」と結んだ。

日下部グリフィス学術文化交流基金

のしおり



（日下部太郎　墮 涙 碑）

財団法人 日下部・グリフィス学術・文化交流基金

日下部・グリフィス学術・文化交流基金の概要

○目的・事業

本基金は、福井における国際交流事業を援助し、もって福井の教育・学術及び文化の発展に寄与することを目的として昭和55年３月に設立されました。

基金の目的を達成するため、次の事業を行っています。

1）日下部太郎及びグリフィスに関する歴史資料室の設置に関する事業
2）ラトガーズ大学及び諸外国への研究者等の派遣並びに招へい事業
3）学生・生徒の国際交流を推進するための事業
4）諸外国との図書館資料の交換等に関する事業
5）福井に在住する外国人研究者及び留学生に対する事業
6）その他目的を達成するために必要な事業

○設立の経緯

福井大学では、かねてから米国ラトガーズ大学との間で、両大学の研究者の交流、学生のサマーセミナーの開催について、話し合いが進められていました。

昭和53年４月、ラトガーズ大学副学長一行が来学したことを契機に、日下部太郎国際交流基金の設置が福井大学創立30周年の記念事業の一環として計画されました。その後既にラトガーズ大学及びその所在地ニュー・ブランズウィック市と親交のあった福井市及び福井青年会議所との間で「日下部太郎連絡協議会」がもたれ、さらに福井県の協力及び民間有志の協賛を得て、昭和55年３月に「財団法人日下部・グリフィス学術・文化交流基金」として発足しました。

○基金の名称（日下部とグリフィス）

本基金の名称は、明治維新期の福井における日米両国の交流の先覚者である福井藩の日下部太郎及び福井明新館教師ウイリアム・エリオット・グリフィスを記念して名づけられました。

日下部太郎は、旧姓を八木八十八といい、弘化２年(1845年)福井の江戸町で福井藩士の家に生まれました。彼は福井藩校で勉学に努め、秀才の誉れが高く、英学修業のため藩命を受けて、米国ニュー・ブランズウィック市にあるラトガーズ大学に留学生として学びました。しかし、あまりにもはげしい勉学のため卒業を目前にして、不幸にも病のために帰らぬ人となりました。

彼の成績がとくに優秀であったので、大学は卒業生の名簿に彼の名前を加えました。さらに、彼は首席卒業者だけに贈られるファイ・ベータ・カッパー協会の黄金の鍵受賞の最初の日本人となりました。

ウィリアム・エリオット・グリフィスは、ラトガーズ大学の学友である秀才日下部太郎の向学心に深い感銘を受け、明治３年福井藩の招きで「明新館」の教師として来福し、福井の教育界に大きな足跡を残しました。福井には約１年滞在し、その後東京大学の前身である大学南校の教師となり、３年間の滞日の後帰国しました。その後昭和２年に来福し、昭和３年85才の生涯を終えるまで、日本のよき理解者として数多くの著書、論文を残し、日本の真の姿を世界に紹介しました。

○運　　営

本基金の資金としては、１億円以上（福井県・福井市の出捐金を含む）を予定しており、現在も寄附金の募集を行っております。

運営は、理事会において行われ、福井大学、福井県、福井市、福井青年会議所の関係者が理事を構成しています。

理 事 長　　五十嵐　直　雄（福井大学長）
副理事長　　吉　水　捨　志（福井県総務部長）
同　　宇野澤　利　勝（福井市教育委員会教育長）
同　　渡　部　貞　清（福井大学附属図書館長）
専務理事　　田　中　　操（福井大学事務局長）

また顧問として中川福井県知事、大武福井市長及び清水前福井大学長をお願いしています。

今後広く県下各界から、理事を求めたいと考えています。

○昭和55年度の事業

本年度は、資金の果実約200万円の予算で、ラトガーズ大学との緊密な連繋をもつために研究者等を派遣すること、ラトガーズ大学図書館にあるグリフィスコレクションの収蔵計画を進めることになっています。

福井大学長（本基金理事長）が、ラトガーズ大学からの招聘を受けて、本年12月初めに渡米することになったので、この機会に本基金から福井大学の教官１名を同行させ、同大学長をはじめ関係者と懇談した結果、福井大学とラトガーズ大学との交流が更に発展することになりました。

なお、昭和56年度においても、本年度の事業を継続することになっています。

財団法人 日下部・グリフィス基金

昭和55年

低金利しぼむ国際交流

事業費今や3割、助成凍結も

国際交流に役立てる目的で設置された財団法人日下部・グリフィス学術・文化交流基金（理事長・千葉堯福井大教授）を、近年の低金利が直撃している。このため同財団内では「基金取り崩しで事業充実」との積極派と「助成事業の削減」との消極派に割れ、結論を見いだしかね、国際交流は低空飛行を余儀なくされている。

同財団は、県内の学校の国際交流事業を助成しようと、一九八〇年三月に設立され、福井青年会議所に事務局が置かれた。

県、福井市からの出捐（えん）金、県内の企業、団体、個人からの寄付金で基本財産をつくり、その利回りで運営。諸外国への研究者や学生の派遣、受け入れ、児童生徒の交流事業への助成、日下部太郎とグリフィスに関する資料収集などに取り組んできた。

基金は約二億二千万円あり、運用利回りが多い時期には六百―一千万円近い事業費を工面できたという。ところが近年の低金利で二―三百万円（本年度は三百十五万円）と、大幅に事業費が減っている。

このため一件当たりの助成額も減少。設立当時はラトガース大へグリフィス関係資料の調査に大学関係者を派遣したこともあったが、今は研究者の海外研修費の助成さえ凍結されている。

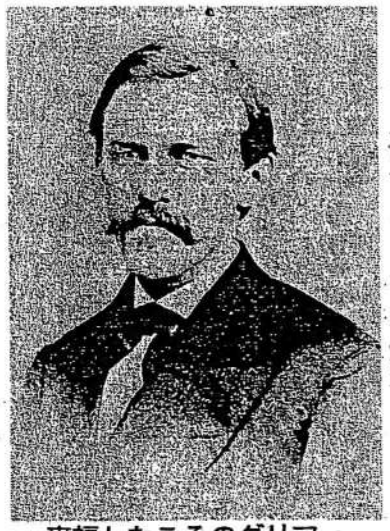
事業にしわ寄せが出ているため、理事や評議員の一部には「基本財産の一部を取り崩し、事業費に充てるべき」という声も上がっている一方「寄付金で成り立つ財団なので基金に手を付けるのは慎重に」「事業内容を見直し助成対象を減らすべき」との意見もあり、結論は出ていない。

学術交流

相次ぐ20周年 正念場

姉妹都市

こうした袋小路の議論の中、資料収集では一九九九年度から、ラトガース大アレクサンダー図書館の所蔵するグリフィスの手紙や日記などの資料を収めたマイクロフィルムの購入を続けている。来年度には全巻そろう予定で、福井大付属図書館に保管。目録も購入して県内の学校や図書館に配布し、一般の人が利用できるようにする計画だ。



来福したころのグリフィスの肖像写真（福井市立郷土歴史博物館蔵）

しかし、財団が掲げる二人に関する歴史資料室の設置は未定で、講演会やシンポジウム開催など学術面の活動も資金的に難しいという。

今年はグリフィスが来福して百三十年、日下部とグリフィスの縁で福井大とラトガース大が学術交流協定を結んで二十年。来年は、福井市とニューブランズウィック市が姉妹都市提携をして二十年を迎える。「国際交流は最初だけ騒いで後は低調」といわれないためにも、財団の今後の取り組みが注目される。

日下部太郎とグリフィス　日下部太郎は福井藩初の留学生として、1868年、米国ニューブランズウィック市のラトガース大に入学。優秀な成績を修めたが卒業目前に病死した。太郎を指導したのがグリフィスで、福井藩の招きで1871年に来福。明新館で化学や物理を教え、本県教育界に大きな影響を与えた。

昭和 58 年 9 月 24 日　Dr. ロストウ夫妻　来福　福井ユアーズホテル

伊井与一郎　酒井康行

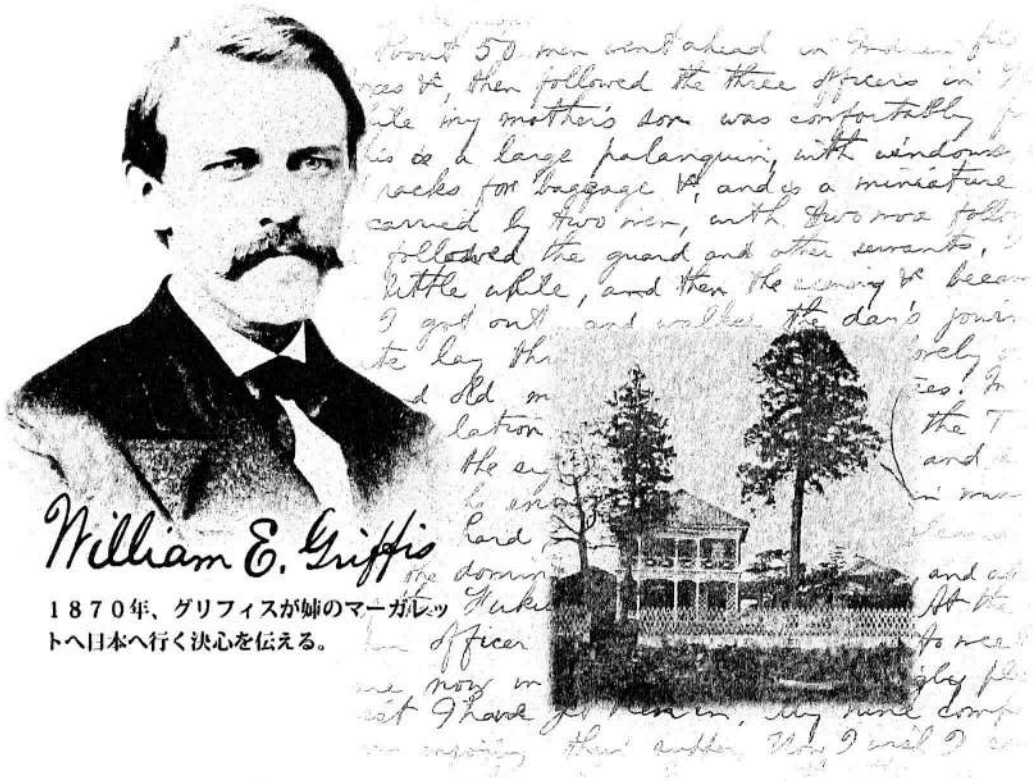
松浦正則

荒木一寿

大武福井市長

堂下健二

Dr. ロストウ夫妻
国家安全保障問題
担当補佐官



1870年、グリフィスが姉のマーガレットへ日本へ行く決心を伝える。

1867年、日下部太郎がニューブランズウィック市ラトガース大学に向けて、郷里福井を出発する際に詠んだ、決意を表した漢詩（七言絶句）。

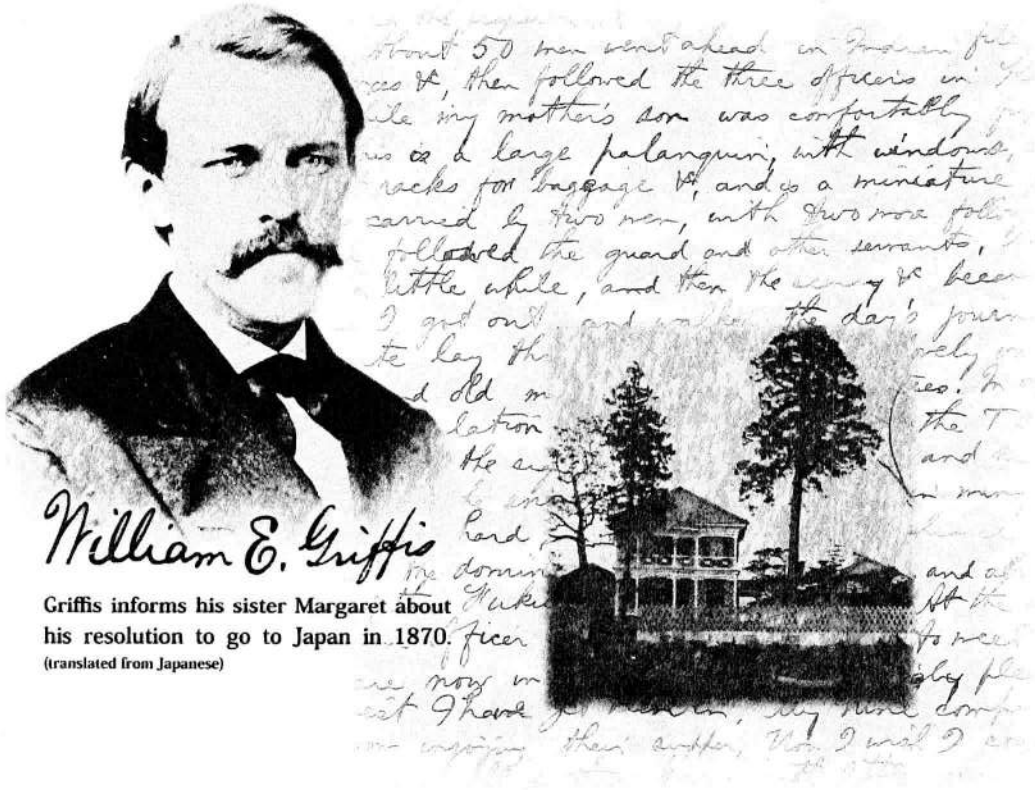
半肩行李雪郷身
好嚮西方獨問津
蓬髪蠻衣請休笑
挽回皇國是何人

私は日本に行く決心をしました。私の学んだ自然科学の知識や技術が、その国や国の人たちのために役立つなら、こんなにうれしいことはありません。困っている人たちのために、何かお手伝いをする。…これは、私が一生をささげようと決心した教会の仕事と同じだと思います。…たとえ不幸がおそってきても、病気でやせ衰えても、途中で死ぬようなことがあっても、決して後悔したり、心変わりしたりはしません。

片方の肩に旅行の行李（荷物）を担いで、雪国出身の私は西方（アメリカ）に向かって、独りで学問への道を尋ねて出発するのだ。散切り頭（洋髪）に外国人の服を着ている私を、どうぞ笑うのをやめてください（笑いなさるな）。遅れた日本の国を振興し発展させるのは誰でしょうか（他でもない私なのです）。

姉妹都市提携25周年記念

福井市国際交流協会



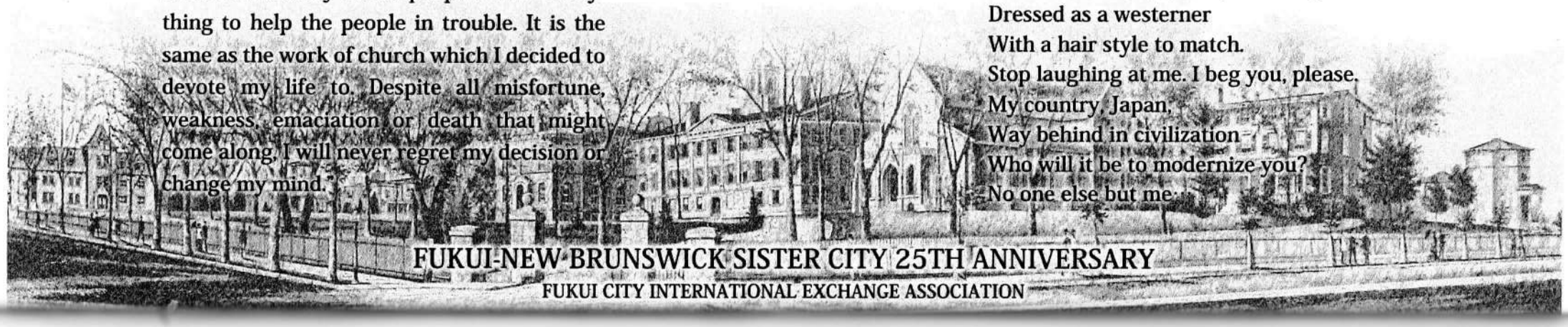
Griffis informs his sister Margaret about his resolution to go to Japan in 1870.
(translated from Japanese)

半肩行李雪郷身
好嚮西方獨問津
蓬髪繻衣請休笑
挽回皇國是何人

This is the poem written by Kusakabe Taro with his strong determination when he was leaving Fukui for Rutgers University of New Brunswick in 1867.

"I made up my mind to go to Japan. There is nothing more pleasant than to know that my natural science knowledge and skills can serve this country and its people. I will do anything to help the people in trouble. It is the same as the work of church which I decided to devote my life to. Despite all misfortune, weakness, emaciation or death that might come along, I will never regret my decision or change my mind."

A native of a snowy country,
I head for the US.
With baggage on a shoulder
I am off on asking for my learning road alone.
Dressed as a westerner
With a hair style to match.
Stop laughing at me. I beg you, please.
My country, Japan,
Way behind in civilization
Who will it be to modernize you?
No one else but me.



FUKUI-NEW BRUNSWICK SISTER CITY 25TH ANNIVERSARY

FUKUI CITY INTERNATIONAL EXCHANGE ASSOCIATION

FAX

平成 28 年 12 月 13 日

（宛先）

酒　井　様

（発信者）外務省国内広報室
東京都千代田区霞が関２－２－１
TEL：０３－５５０１－８１２９
FAX：０３－５５０１－８１２８

（本紙を含め全　１　枚）

□至急！　☑ご確認ください　□ご返信ください　□ご回覧ください

＜連絡事項＞

平素より外務省の施策にご理解・ご協力いただきまして，ありがとうございます。

先程ご照会のございました，隔月刊誌「ワールド・プラザ」（外務省国際文化交流情報センター編集，国際文化フォーラム出版）につきまして調べましたところ，１９９６年１０月―１１月号を最後に以後休刊になっておりましたので，ご連絡いたします。

どうぞよろしくお願い申し上げます。

（了）

昭和63年12月18日　ワールドプラザ掲載（日下部太郎）

ワールドプラザ

WORLDPLAZA　外務省「国際文化交流情報センター」編集

NO. 1 1988 DECEMBER 創刊号

特集：草の根国際交流新時代

ワールドプラザ DATA BANK
国際文化交流イベント・カレンダー

連載①国際交流史を発掘する

日本人をアメリカに認識させた幕末の海外留学生

松村正義（帝京大学教授）

福井藩の不運な留学生

米国ニュージャージー州ニューブランズウィック市のウィロー・グローブ墓地の一角に、高さ二メートルに近い、八つの白いオベリスク（尖頭）形の日本人の墓が淋しく立ち並んでいる。

いずれも、今から百年以上前に青雲の志を抱いて、はるばる日本からこの地に渡り、はげしい勉学をつづけながら、不運にも病いのためその志なかばにして異国で夭逝していった、日本人留学生らのものなのだ。

異郷で夭逝した福井藩出身の日下部太郎

その中の一人に、福井藩出身の日下部太郎がいる。早くから、彼はその俊才ぶりを発揮し、開明的だった藩主・松平春嶽に認められた。当時、すでに長崎に来ていたオランダ改革派教会の宣教師フルベッキーからニューヨークの同派教会事務局長フェーリスあての紹介状をもち、将来の日本近代化のための指導者となるべく、明治維新前夜の一八六七（慶応三）年に勇躍して米国へ向かう。そしてそのフェーリスの斡旋で、ニューブランズウィック市にあるラトガース大学に入学するのである。

もともと、同じ福井藩の幕末の志士・橋本左内の薫陶を受け、頭脳明晰だった彼は、日夜ほとんど寝食を忘れて勉学にはげんだ甲斐あって、初めグラマー・スクールに入ったけれども急速に英語を習得し、まもなく学部へ進み、さらに勉強をつづけること丸三年。しかし、不運にも肺をおかされて、ついに一八七〇（明治三）年の四月十三日、二十五歳の若さで、卒業を目前にしながらニューブランズウィック市で冥界へ旅立ってしまう。まことに哀れではあった。

それにしても、その時にラトガース大学のとった対処ぶりもりっぱであった。日下部の遺骸がワシントンの日本公使館の協力で、同市の上記墓地に手厚く葬られるや、卒業の二ヵ月前に他界したにかかわらず、彼の名を一八七〇年卒業クラスに加えるとともに、ファイ・ベータ・カッパ協会に申請して、米国の成績優秀な大学生にのみ与えられる同協会賞を、その小さな金の鍵とともに墓前に捧げるのである。それは、日本人として最初の受賞者でもあった。

片や、はるか米国で留学中だっ

▶厚き友情の舞台となったラトガース大学

愕させられた福井藩であったが、こんどは、留学生を派遣するかわりに、いわゆる〝お雇い外国人〟を当時の同藩の藩校・明新館に招いて、藩内の知識欲に燃える青年らに欧米の進歩した自然科学を学ばせることにし、またもその斡旋をフルベッキーに依頼した。

近代日本を世界に紹介したアメリカ人

ふたたび、フルベッキーから要請を受けたラトガース大学では、すぐに人選に入り、当時、日下部の二年先輩で、かつ講師としてラテ

リオット・グリッフィス William Elliot Griffis に、白羽の矢を立てた。

一八四三年にフィラデルフィア市に生まれた彼は、少年のころ同市の造船所で、やがてペリー提督を乗せて日本遠征へ向かうことになる軍艦サスケハナ号の建造されているのを眺めたというが、その強い印象にも刺激されて、まだ弱冠二十七歳の身ながら、遠い東洋のなお未知の国・日本での教授活動を応諾する。その時の彼の決心の言辞――。

「日下部に見るように、日本人がそんなにすばらしい頭脳をもった人たちなら、ぜひとも行って教えてみたい」

かくてグリッフィスは、日下部の墓に捧げられたファイ・ベータ・カッパ賞の金の鍵をたずさえて、その年の暮れ、米国の東西両海岸を結ぶ完成したばかりの、インディアンからの襲撃に備えて警備ももものしい大陸横断鉄道に乗って、ニューヨークからサンフランシスコに出、そこから汽船で大海原を渡って横浜に入港。まだ汽車も走っていない福井の城下町

一一年も春の三月であった。

そして福井に到着後、はやばやと彼は、日下部の家を訪れて、あのファイ・ベータ・カッパ賞の金の鍵を彼の父へ手渡した。その時、彼の母はわが子の異国での他界に悲嘆死してすでに亡く、父だけがグリッフィスの前にひれ伏すようにして、その金の鍵を受け取るのである。その折りの情景を、グリッフィスは、ラトガース大学のアレキサンダー図書館に残されている日本滞在時の日記の中で書き綴っているが、読む者の涙をさそわずにおかない。

ともあれ、以後、廃藩置県の詔書が発せられて、明治五年の初めに大学南校（現、東京大学）の教授職に就くため上京するまでの一年間近く、グリッフィスは福井にあって明新館に通いながら、藩内の若い生徒たちに物理や化学を熱心に教えこんだ。なにしろ明治初年の福井でのこと、外人教師の授業という珍らしさもあって、教室は連日満員の盛況を呈したという。

かくてグリッフィスは、大学南校での二年間の職務を終えて一八七四（明治七）年に帰米し、ふたたびラトガース大学の教壇にもどった。そして一九二七（昭和二）年に久方ぶりに福井をもう一度訪れることができた喜びもつかのま、その翌年に八十五歳の高齢で逝去する。その間、日本の当時の実情やその後のめざましい近代化の過程を、米国内にはもちろんのこと、広く世界へ向けて紹介した彼の活発な言論活動の数々は、われわれ日本人にとって、決して忘れてはならないことであろう。

日本に関する彼の著書は、『皇国』（The Mikado's Empire）、『ミカド』、『ペリー』、『ハリス』、『ブルベッキー』や『日本の宗教』などじつに一八冊におよび、なかでも『皇国』は一九一二年までになんと十二版を重ねた。雑誌・新聞所載の論文・記事も数百編を数えたほか、講演も数百回に達しているほどである。

▲近代日本に貢献した日下部の師、W・E・グリッフィス

二人の間をとりもつ縁

私も、同じ郷土の出身者という心情から、一九七三（昭和四十八）年の春四月、冒頭に述べた日下部の墓をラトガース大学のアーダス・バークス教授の案内で、ニューヨークからニューブランズウィック市に訪ねてお参りした。このとき、誰の心ないしわざであったのか、あの太郎の墓をはじめオベリスク形のほとんどすべての日本人留学生の墓が、なぎ倒されへし折られて、見るも無残な情景を呈していたのである。

いたたまれないような気持ちになった私は、それより二年後、日本に帰国してほどない五月に、その日下部らの墓の惨状を訴えたいとの思いもあって、ニューヨークでの思い出をささやかながら『ハドソン川は静かに流れる』にまとめてみた。

幸いに、その反響は大きかった。地元の『福井新聞』が、昭和五十年六月十六日の紙面で、現地の墓の荒れ放題の状況を報じて一般に訴えてくれた。

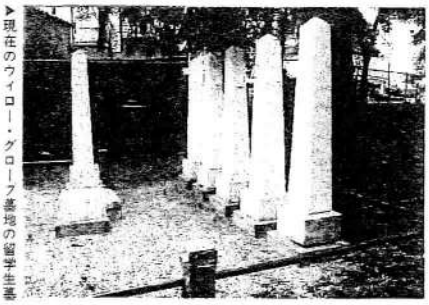
なににもましてうれしかったのは、拙著を通じて、ニューブランズウィック市のウィロー・グローブ墓地の惨状を知った福井市の青年会議所が、さっそく、日下部らの墓を修復するため募金活動へ乗り出すとともに、数人の有志を派遣して現地調査を開始したことであった。

以来、同青年会議所を中心とした地元・福井市の人たちの積極的な関心によって、日下部の百年忌にあたることもあって、昭和五十二年十月には、大武・福井市長が訪米・参列して霊前に献花し、彼の墓の修復費として二〇〇〇ドルをニューブランズウィック市に寄付し、五十六年には福井大学とラトガース大学との間で姉妹大学の関係が結ばれた。

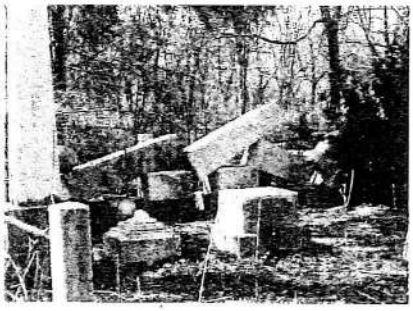
その友好の関係はさらに強まり、翌五十七年五月に福井とニューブランズウィック両市の間で姉妹都市の提携も調印された。以後、両市ならびに両大学の間で、市長や市民の相互訪問、学生の交換留学のほか、高校生レベルの合唱団とジュニア・オーケストラの相互公演や各種展示会の開催など、諸種の交流が活発につづけられているのである。

けだし、今や、百十年以上も前に生まれた幕末の若き福井藩留学生・日下部太郎と、明治維新の初め米国ニュージャージー州ラトガース大学からやってきた福井藩校「明新館」の教師、ウィリアム・グリッフィスとの美わしい友情がとりもつ縁で、友好を願う国際交流の花が咲きつづけているのである。

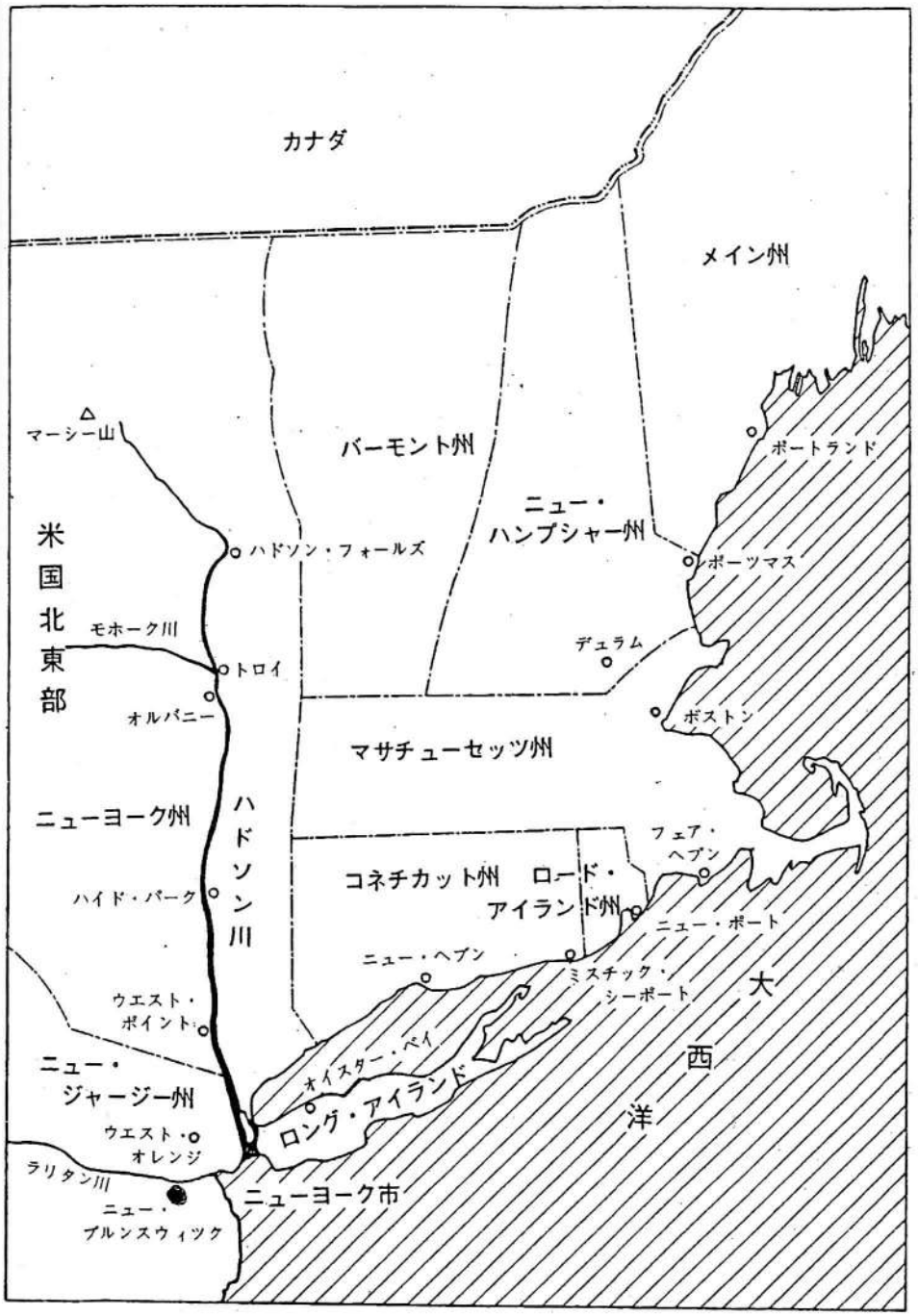
（前国際交流基金ニューヨーク事務所長、元外交官、エッセイスト）



▶現在のウィロー・グローブ墓地の留学生墓



▶誰のしわざか十五年前はこんな状態だった



ハドソン川は静かに流れる

—私の日米外交史—

松村正義

著者略歴

松村正義（まつむら・まさよし）
1928(昭和3)年　福井県生れ
1952年　東京大学法学部卒、外務省(外交史料館)入省
その後　沖縄（本土復帰前）、ロンドン、スーダン、本省情報文化局、ニューヨークに勤務
現在　衆議院外務委員会調査員

ハドソン川は静かに流れる
700円
発　行　昭和50年5月25日
著　者　松村正義
発行所　新日本教育図書株式会社
発行者　藤田修司
印　刷　瞬報社写真印刷株式会社

冠省　先日は突然にお電話し、早速に種々
資料をお送り下さいまして、有難うございました。
お蔭さまで、同封のプールに、つづき「創刊号
56-57頁のことあり、何とか出版社の要請に応ずる
ことができました。厚く御礼申し上げます。
右取り敢えず、ご報告まで。
季節柄、一層ご自愛の上、よい新年をお迎え
下さい。
昭和63年12月18日

福井市
福井康行様

不備

帝京大学教授
法学博士　松村正義

勤務先　〒192-03　東京都八王子市大塚三五九番地　文学部国際文化学科　電話（〇四二六）七六―八二一一～四
自宅　〒275　千葉県習志野市秋津二―二―一―二〇三　電話（〇四七四）五一―七一三三

福井県三国町出身
（東大九十）

福井北ロータリークラブ会報　第一五五九号　平成十三年五月三十日　第二〇〇五回例会

アメリカ留学第一期生　日下部太郎について

会員　酒井　康行

福井県における国際交流の初めの頃は、どのようなものであったか、あるいは今でこそ福井県国際交流会館という立派なものが出来ましたけれども、昭和五十年・五十一年には、全然ありませんし、当時中川知事・大武市長の時代に窓口になるポジションすらないという背景の中で、この日下部太郎を福井青年会議所という団体が取り上げたわけです。私は未だ三十五歳でしたけれど、日下部太郎さんを顕彰することによって皆様に何かお役に立つのではないかと、青年会議所と言う団体が携わってやったというところに非常に大きい功績があったと思いますし、その後色々なことがこのことをスタートにして福井県の国際交流、福井市の国際交流あるいは姉妹関係にどんどん広がっていったのではないかと思います。

一八六七年（慶応三年）に武家社会が滅びて行くことを松平春嶽公はもう察知していたわけです。だから武士に対して手に職を持てと盛んに奨励をしておりますが、この福井の地で林檎は育ちません。従って農業の方々はもっと蝦夷の地へ行かなければと青森県の弘前市のＪＡ（農協）へ行きますと、松平春嶽が林檎の神様として祭られています。先見の明があった若い松平春嶽は、この難局を乗り切るために教育に力を入れ、若い優秀なものを洋学といえば蘭学が主流であった時代に「アメリカに行け」と藩の命で行かせるという事になります。長崎から船に乗って太平洋をジャワから二ューヨークへ百五十日かかって行きます。これはもう必死の覚悟で行かれたに違いないと感じますし、よく辿り着いたと思います。そこで辿り着いたところが東海岸ニュージャージ州というニューヨークの隣の州ですけれども、そこにありますラドガース大学に入ります。入学して結核で倒れその場で骨を埋めたと言う事であればそれで終わってしまいますが、日下部太郎は、ファイ・ベータ・カッパーという賞を卒業していないのに貰った形で大変な取り扱いをなされているわけです。そのニューブランズ・ウイック市へ私がちょうど行きました時は、アメリカも日本の学園闘争と同じことでラジカル運動が激しくて所謂異邦人に対する差別で、大学の中にありました日本人留学生の墓がどんどん壊されていました。それがウイロウ・グローブの森にある日本人留学生の墓です。倒れていますが、ここに書かれているのは、

Taro Kusakabe A Native of Echizen Japan died April 13 1870 Aged 25Years 尚、その側面の日本文字の下方には、

A Student in Rutgers College of 70 and a member P.B.K. となっております。ファイ・ベーター・カッパーとはどういう事なのかと言いますと、各大学の学部を主席で卒業した人達で作る友愛クラブ、また、そういう人達を管理する組織、

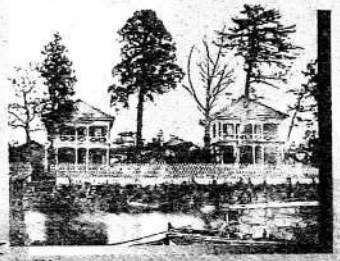
協会が存在しています。その中のメンバーの中に日下部太郎が入っていて、日本人としては勿論初めてであろうし、高い位についているそのくらい優秀な男であったと云うことです。

自分の家庭の境遇も非常に厳しなかでアメリカに出向き、次男、三男が同じ年に、日下部太郎が亡くなる一年前に二人とも亡くされるというお父さん・お母さんの気持ちを考えますと、家財道具を整理して留学資金として百ドル送金している、しかも子供達は、亡くなって行くそんな中で自分の長男は、アメリカにいるという事で、「五十三歳の老齢で余命幾ばくも無いが、この父を不憫に思うなら一日でも早く帰国してくれ」という手紙を送っています。その中で病に倒れるわけですけれども、その病は結核です。結核菌の発見は、コッホによって一八八二年、一八六七年という随分前のになりますので不治の病ということで倒れるわけです。同じ時代に日下部太郎と同じラドガース大学に日本から留学した学生は十三人いらっしゃいますが、病で倒れた方は、七～八名おります。その後、明治の初めの頃は、四十人くらいになります。ところが、卒業したという人は四人しかいません。その四人の中に日下部太郎が入っております。

福井北ロータリークラブの会員であった福大学教授ロバート・フラーシャム氏の協力を得て、昭和五十年六月に渡米しました。翌年（米国建国二百年の年）昭和五十一年十一月三日（文化の日）に文京地区の福井市立図書館の横に日下部・グリフィス顕彰碑を建立除幕する計画を実行して行くわけですが、当時駐日米大使（ジェームス・ホッドソン）を招聘するに当たり故若泉敬先生には、大変お世話になりました。私は三十五歳の時にこんな事をさせて頂きましてずっと今日まで生きて来ましたが、先日ふっと親父の写真の整理をしておりましたら、亡くなられて三年目の確か昭和五十五年に庶民は政治家坪川信三さんの顕彰除幕式の企画が盛り上がり、その実行委員長を私の親父（酒井薫）が引き受け、足羽山に建立した写真が出て来ました。親子二代して顕彰除幕式をさせて頂けた、そういう土俵に私はいるんだなと大変感慨深いものを感じた訳であります。

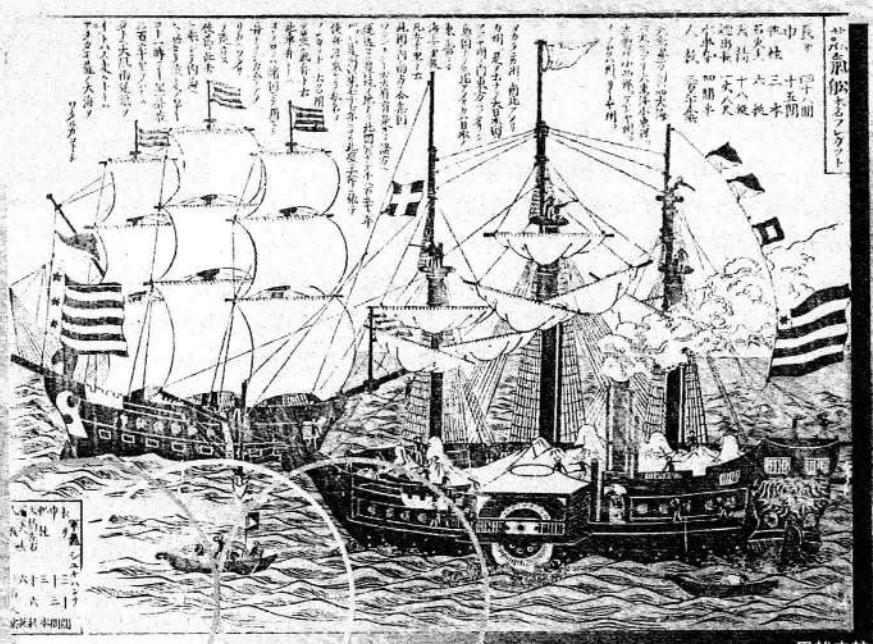
福井市・ニューブランズウィック市 姉妹都市20周年記念シンポジウム

幕末 福井、姉妹都市交流の原点を探る。



異人館
(向かって左グリフィス館)

長崎遊学当時の日下部太郎



黒船来航

グリフィス博士と生徒たち

福井市とニューブランズウィック市は、昭和57年に姉妹都市提携をして以来、これまで市民訪問団やジュニア大使の相互派遣など、文化、教育、産業など各分野で市民レベルでの交流が活発に行われ、今年で20周年を迎えます。
その記念シンポジウムとして、幕末から明治維新の日米の橋渡しとなり、姉妹都市の契機ともなった日下部太郎とウィリアムス・E・グリフィスの事績をはじめ、福井藩とアメリカや諸外国との関係や交流など、幕末の国際情勢や歴史的背景を探り、今日から未来への国際交流を考えます。

「幕末における国際化と福井藩」

平成14年10月26日(土) 開場12:30～ ■13:00～ | 福井県生活学習館 1F 多目的ホール

第1部 講演

■13:10～14:30

アレクサンダー図書館
グリフィスコレクション専門員
ルース・シモンズ氏

元中部大学教授
山下 英一氏

※同時通訳で行います。

第2部 パネルディスカッション

■14:30～16:30

【基調報告】大阪大学大学院教授　前熊本大学教授
猪飼 隆明氏

【討　論】コーディネーター
福井市国際交流協会副会長
堂下 健二氏

パネリスト

ジマーリ美術館館長・ラトガース大学教授
フィリップ・デニス・ケイト氏

アレクサンダー図書館グリフィスコレクション専門員
ルース・シモンズ氏

ニューブランズウィック市国際交流課長
ジェーン・タブリン氏

大阪大学大学院教授・前熊本大学教授
猪飼 隆明氏

福井市史近世史部会副部会長
舟澤 茂樹氏

お申し込み お問合せ
福井市役所《国際交流課》
〒910-8511 福井市大手3丁目10-1
TEL.0776-20-5271
FAX.0776-20-5274

入場無料! ハガキ・電話、またはFAXで福井市役所国際交流課までお申込みください。入場整理券をお送りします。

ROOTS OF JAPANESE-AMERICAN FRIENDSHIP
FUKUI, RUTGERS and NEW BRUNSWICK
1853 T0 1928

The 20th Anniversary of Fukui-New Brunswick Sister-Cities Relationship
福井市・ニューブランズウィック市姉妹都市20周年記念展

日米友好の原点
福井、ラトガース、ニューブランズウィック
1853-1928

ごあいさつ

2002(平成14)年は、福井市とアメリカのニュージャージー州にあるニューブランズウィック市とが、姉妹都市として交流を始めて20周年にあたります。そこで、この節目の年に、ニューブランズウィック市内にある州立ラトガース大学附属のアレクサンダー図書館から、交流の原点とも言えるグリフィスコレクションの史料をお借りして、ここ福井市美術館にて展示することとなりました。

そもそも両市の交流の原点は、1867(慶応3)年、福井藩初の海外留学生、日下部太郎がラトガース大学に学ぶことから始まります。日下部はこの大学で幅広く学び、たくさんの知識を吸収しますが、志半ば、クラスの首席として卒業する二ヶ月前に、残念ながら病に冒され亡くなります。しかし、大学の二年先輩であり友人であるウィリアム・E・グリフィスが、福井藩の藩校「明新館」に教師として招かれ、明治維新後の日本の新しい教育に大きく貢献しました。また、帰国後も、多くの著書で幕末から明治維新にかけての福井、ひいては日本の歴史、文化、風俗を世界に紹介したのです。これらのことは、日下部の勤勉で誠実、そして礼儀正しい人柄に惹かれたグリフィスが、彼の志を継いだと言えるのではないでしょうか。彼ら二人の友情がきっかけとなり、また彼らを忘れずにいた両市民によって、遠く離れた二つの都市が、現在も堅い友情で結ばれているのです。

日下部とグリフィスがともに学んだラトガース大学の附属アレクサンダー図書館の貴重な史料に触れることで、ニューブランズウィック市の文化における理解を深め、今後の国際交流の発展・促進を願って開催いたします。

2002(平成14)年10月
福井市長
酒井　哲夫

謝辞

この展覧会の開催にあたり、貴重な史料をご貸与いただきましたニュージャージー州立ラトガース大学附属アレクサンダー図書館(ニューブランズウィック市)、ならびにご教示、ご協力をいただきました関係各位、さらにここにはお名前を記すことのできなかった方々に深く感謝いたします。(敬称略)

ラトガース大学アレクサンダー図書館
ルース・J・シモンズ

6 ギドー・フルベッキ(1830-1898年)の写真
Photograph of Guido Verbeck (1830-1898).

1 マシュー・カルブレイス・ペリー提督(1794-1858年)が描かれた大判印刷物
Broadside of Commodore Matthew Calbraith Perry (1794-1858).

一考一記

20周年迎えた姉妹都市交流

福井市国際交流協会副会長　堂下　健二

昭和五十年六月、福井青年会議所（JC）がある事業を企画した。幕末に福井からアメリカに留学、惜しくも卒業を前に優秀な成績を残して死んだ日下部太郎の志をいま一度福井に戻し、これからの日本を背負う青少年に大きな刺激を与えようとの狙いだった。

日下部が百年以上も前に日本の近代化を目指し、大きな志を基に命を懸けて降り立ったラトガース大学のキャンパスを訪れたのは、当時理事長であった酒井康行氏と翌年の理事長予定者であった加藤一二氏、そして私の三人であった。

「はるばる越前からよく来てくれた」と副学長のアルダス・バークス博士の言葉に感激した三人は、案内してくれた「越前ルーム」と称する地下資料室に入り、その膨大な量のグリフィス・コレクションを前に呆然(ぼう)となった。酒井氏は「まるで百年前の福井の塩漬けだ」と叫んだ。

事業を進めるにはタイミングが重要である。昭和五十年には日米間の問題はほとんど沈着し、十月には昭和天皇のご訪米が決まっていた。日本はオイルショックも克服しバブル経済の入り口に立っていた時であり、一方アメリカはベトナム戦争が終結しニクソンからフォードへと移り、沈滞気味の状態の中で「ジャパン・アズ・ナンバーワン」とか言われ、日本への評価が高まっていた。

ニューブランズウィック（NB）市にある日下部の百年忌を仏式で行うなどした。在米日本人もNYタイムズの写真入りの記事を見て、多数NB市を訪れるようになった。

帰国して酒井・加藤両氏は当時の大武市長に委細を報告し、日下部の死を追悼する吉田東篁の「墮涙碑」の建設を提言。市立図書館横の土地を提供してもらい翌年、ホッジソン駐日アメリカ大使の臨席の下に、福井JCの手によってその除幕式を行ったのである。

当時は国際化という言葉はまだ観念的なものでしかなかったが、大武市長はこのJCの動きを黙っては見ていなかった。

NB市側も停滞する市の活性化に折からの日本ブームに乗り、日本との歴史的な関係を重要視するようになり、新しく民主党から市長に選ばれたジョン・A・リンチ氏は、二度の災害を克服した福井市に学びたいと福井を訪れた。大武市長との間で友好提携の運びとなり、ついに昭和五十七年、福井で最初の外国の都市と姉妹提携することになったのである。

以来二十年、福井は大武市長から酒井市長に、そしてNB市はリンチ氏からケイヒル氏に取って代わられた。リンチ氏はニュージャージー州上院議長に登り詰め、栗田福井県知事との間で州・県の姉妹関係を創り上げる努力をされ、今日に至っている。

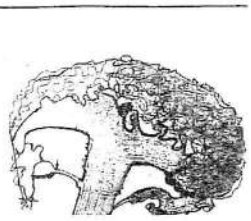
言うまでもなく、これらの友好関係はお互いの向上発展のために寄与するものでなければならない。現在までのところ決して密度の高い交流ではなかった。アメリカは移民の国であり、歴史は大事にするが郷土愛のような感覚は薄い。「友あり遠方より…」というような儒教的なものを期待しても、裏切られるかもしれない。プラグマティズム（実用主義）の精神を理解することも大切だ。

行政主導の交流から、少しでも民間交流を深めることも必要である。

しかし要は、日下部の国を思う志と国を超えた友情を示したグリフィスのかけがえのない人間愛を基に、この交流を続けなければならないと思っている。（福井市西木田3丁目、68歳）

Question Box
あなたとつくる
風の森
りたい
りたい
福井新聞の紙面には、健康や
教育などいろいろな相談コーナ

論説



福井JC40周年

未来につなげ「日下部」精神

福井青年会議所が創立四十周年を迎え、記念式を開いた。日下部太郎を顕彰し、国際交流を大きく前進させた四十年の歩みを糧に新しい活動を展開することを誓い合った。来年秋には福井で全国会員大会を開く。記念の年を節目に今後の飛躍を期待する。

同会議所が創立されたのは一九六二(昭和三十七)年である。それ以前にも設立、活動の歴史を持つが、一九六二年を創立としている。以来ほぼ十年を周期に活動を展開してきた。

最初の十年は創立期に特有な熱っぽい理論を積み上げている。綱領にある社会的、国家的、国際的な責任をどう果たしていくか会員が熱心に討議して理論を固めた。韓国水原青年会議所との姉妹締結は活動を海外に向けるさきがけとなった。

次の約十年は、米国へ留学した福井藩の日下部太郎を顕彰し、米国と国際交流を進めた海外活動の発展段階といっていいだろう。

一九七五(同五十)年、日下部太郎調査団として米国に行った当時の理事長・酒井康行さんは「まだ福井市にも県にも国際交流の窓口がなかった。手探りの調査、資料発掘だった。顕彰碑を建て、姉妹提携を結ぶまでの会員の努力と汗こそ福井JCの精神となり、国際交流活動の柱になったと思う」と話す。

日下部太郎がラトガース大学で学び、その縁でグリフィスが福井の地で教べんをとった歴史的な事実。そこを原点に大学、行政間の姉妹提携に広がっていった交流の輪は同会議所の活動の成果である。その力と心意気が今の同会議所会員に受けつながれている。

第三段階の一九八五(同六十)年からは、地域に目を向けた活動を重視した十年といえよう。ふくいデザインフォーラム、宝さがし、街づくり運動、越前朝倉わいわい物語など地域活性化に寄与した活動を展開した。

一九九五(平成七)年からは、さらに地域活性化を中心にした活動を進め、宝さがし事業、越前地球村、幕末サミット、「ひと・まちフェスタ」などのイベント、日本海重油流出事故のボランティアなどの活動を行った。

これらの歴史を踏まえた四十周年記念式では地域社会に貢献できる組織となるためのステップととらえ、さらに「誇りの国ふくい」を目指して五十周年に向かうことを誓った。

来年秋は、全国会員大会の開催が決まっている。全国から大勢の会員が福井に参集する。福井を全国に発信する機会だ。

しかし地域経済社会は長く低迷し、先行きは不透明である。こんなときこそ、米国に渡り勉強した福井の先人、日下部太郎の精神を今の社会に生かす活躍を期待したい。

議が最終局面

は新規建設へ

表層深層

高速道路の将来像を決める道路関係四公団民営化推進委員会(今井敬委員長)の最終報告作成に向け、大枠が固まった。タイムリミットが十二月上旬に迫り、焦点は新規建設の仕組みや財源の規模など具体論をめぐる攻防に移る。与党からは「財

●今井―猪瀬論争

東京・虎ノ門のビルで開かれた十五日の推進委は、休憩を挟んで六時間以上に及んだ。

猪瀬直樹委員「私の主張は、委員会のこれまでの流れに沿ったものだ」

「九千三百四十二キロは国民に約束したことで、政治に対する信頼、行政の一貫性という観点から実現させるのが大切だ」

古賀氏は十五日に都内で開かれた道路関係の集会で、高速道路整備計画

たが言っているのは順番が違う」

合意文の「国・地方に異なることになった。

を加速するよう指示したのを受け、意見集約を急いだ今井氏は十三、十四両日にも各委員に秘密会を呼び掛けた。だが日程の折り合いがつかず、十五日の会合はぶっつけ本番で臨み、結局は猪瀬氏に押し切られた。今井氏は十五日に大枠決定という目標は達成したが、思い描いた内容とは大きく

●強まる圧力

かせ根回しを図ったが、反発は強まるばかりだった。

連合、民

国政選挙

連合(笹森清会長)は、九月の代表選後も続く民主党の混迷を踏まえ、同党支持を基軸とし方針を見直しを来年二月を

発言採

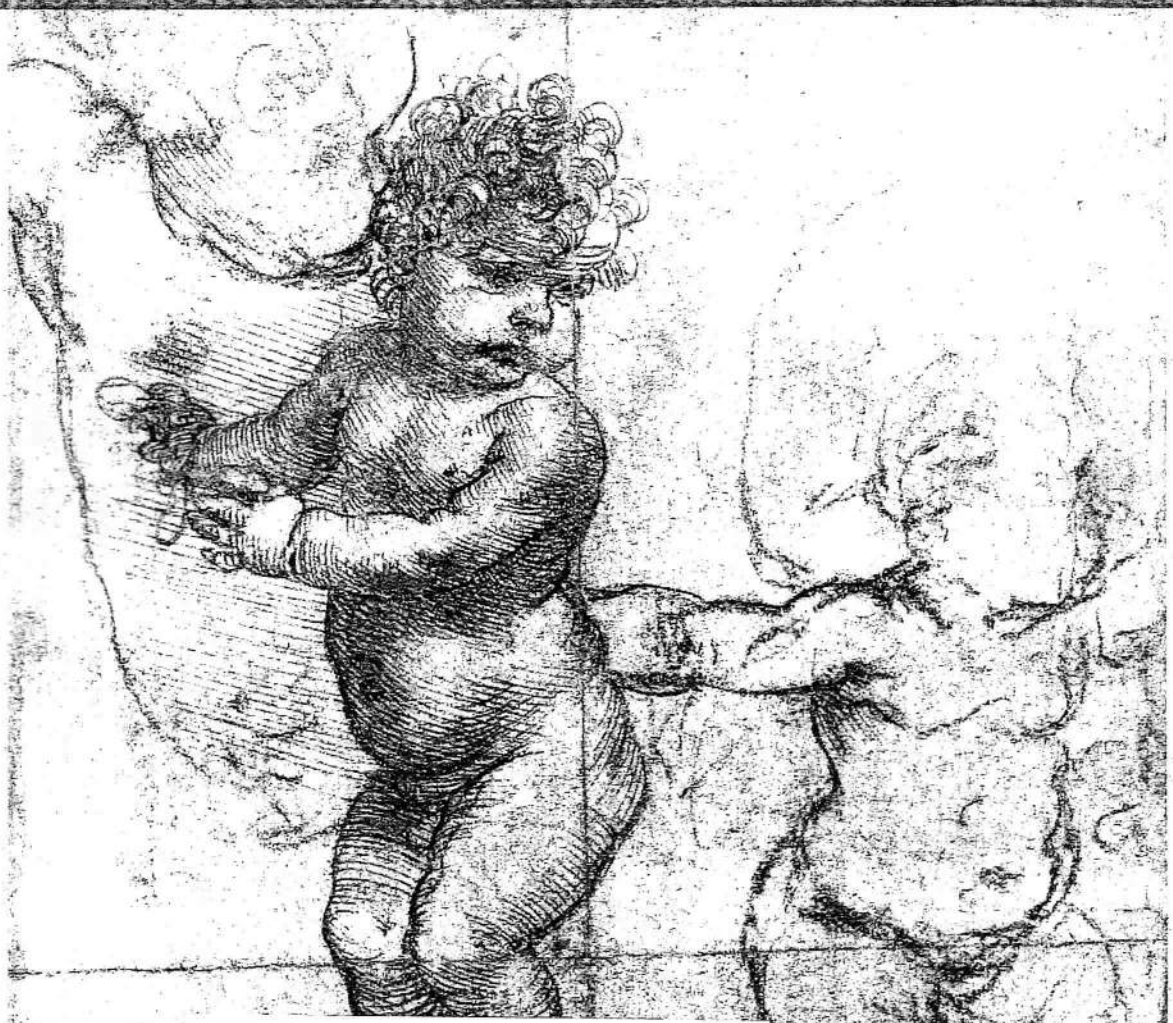
10日

▽優秀だが羽田孜民主(若手は)

だが、辛抱を(自分たちが)のことを「賞れた」とテレたら、(国民ういう政党う。(11日、

▽小泉君の中曽根康弘抗勢力との二挙対策には

選択 8
AUG. 2009 VOL.35 NO.8
三万人のための情報誌
2009年8月1日発行 昭和50年3月17日第三種郵便物認可
第35巻第8号 毎月1日発行



紺野大介 (*Konno Daisuke*)

1945年2月、満州奉天市生まれ。東京大学大学院工学系研究科修了、工学博士。旧ソ連モスクワ大学数理統計研究所遊学。(株)荏原製作所事業部長を経て、セイコー電子工業(株)へ招請され取締役CTO就任、関係会社数社の会社管掌役員兼務。'00年公益シンクタンク創業支援推進機構(ETT)を創設し理事長就任。

この間、日本機械学会論文審査委員、通産省工業技術院大型国家プロジェクト作業部会長、新潟市長顧問(市政創造Adviser)など歴任。

'94年より中国清華大学招聘教授、'02年日中科学技術交流協会常務理事、'08年北京大学歴史学系中外関係史研究所客座教授、'09年政府創設の国策会社・(株)産業革新機構初代取締役・産業革新委員、'10年(社)教育配信基盤機構理事長など兼任。著書に橋本左内作「啓発録」、吉田松陰作「留魂録」英完訳書(錦正社)、「中国の頭脳　清華大学と北京大学」(朝日新聞社)、「音楽と工学の狭間で」(新樹社)など。

ETT
創業支援推進機構

2016年3月24日

株式会社 酒井染料商会
代表取締役　酒井康行 様

前略
時下ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。
平素はお世話になりありがとうございます。

弊機構理事長 紺野より著書「民度革命のすすめ」および2～3の抜き刷りをお送りするよう申し付かりましたので送付させて頂きます。
どうぞよろしくご査収の程お願い申し上げます。

草々

理事長秘書　上野

酒井康行様

冠省。
昨日はお電話を戴きまして ありがとうございました。
日下部太郎を中心に、酒匂 福井の文化顕彰をしたいとの由、了解致しました。仰要請の拙訳書、橋本左内15歳時の著作「啓発録」の英訳使用の件、出典を明確にした上、どうぞ御使用下さい。
合わせ、ここに拙著「民度革命のすすめ」他、報文copyを同封致します。本書は月刊誌「選択」に50回連載したものをまとめて頂いたものです。第一章の"幕末の日本人を想う"に入っております。言論の雑誌の掲載copyも同封しておきます。
どうぞ御参考にして下さい。不一。

紺野誠文 拝

〒105-0011　東京都港区芝公園3-5-8　機械振興会館 3F
TEL：03-6435-9171　FAX：03-6435-9172
www.ett.or.jp

連載31

あるコスモポリタンの憂国

清華大学招聘教授 紺野 大介

幕末期の米国留学と今

ニューヨークから南西に五十km程行くと、NJ州ニューブラウンズウィック市にあるラトガース州立大学のキャンパスが見えてくる。一七六六年創立、全米で八番目に古い歴史を有する大学である。ここは知る人ぞ知る幕末期の秀才・日下部太郎(一八四五～一八七〇：旧名・八木八十八)が、日本人留学生第一号として米国大学を最初に卒業したとされるエリア。非凡なるが故、米国でも日本でも惜しまれながら卒業直前、弱冠二十五歳で客死した場所でもある。

その墓は公立図書館の裏手ウィロー・グローブ共同墓地にある。今年五月の訪米時立ち寄った。そこは「日本セクション」と呼ばれる鐵枠で囲まれた一区画。日下部以下六人の、高さ二m程の白い御影石のようなオベリスク状モニュメントは風化が進み、墓石の氏名墨書などは侵食され無い。彫られた文字は「大日本越前日下部太郎墓」。越前の文字が大日本と日下部の間に小さく控え目に彫られてあり、死亡年月日が明記されている。日下部を憂国の士として高く評価した当時のキャンベル学長の弔辞によると、結核で死の床に伏してもなおキリスト教に改宗することなく「武士」のまま他界したとの事である。余命幾ばくもなくとも書物を離さず、指導教官から本を取り上げられる程学業熱心であった日下部の墓は、少し荒廃しており、供養の花入れも倒れたままであった。

墓参の帰途ラトガース大学アレキサンダー図書館を訪問し、大学記録保管所・特別コレクションのF・ペローン館長(Curator)とお会いした。ここはグリフィス・コレクションとして関係図書などを収納した一室。黎明期の日本で後に「お雇い教師」となったグリフィスに日下部はここでラテン語を習ったのである。館長は日下部の関係歴史文献を入れた二つの紙製ファイルボックスを取り出して来た。文献は決して多くない。幾つかの英文の刷り物、写真に混ざり、山下英一、高木不二、阿部珠理など各氏による地道な研究の一端となる邦文コピーが納められていた。

＊

日下部太郎は十三歳で越前福井の藩校明道館に入学、二十一歳のとき洋学の中心地であった長崎遊学の命をうけた。そこでオランダ改革派教会の宣教師G・F・フルベッキから英語を習い、「彼ほどの明敏な日本人は見当たらない」との強烈な印象を与えた様子である。宣教師とラトガース大学がオランダ系だった縁で、日下部はこの大学へ留学したのであろう。日下部渡米時のアメリカは南北戦争が終了した直後。他方、フルベッキはかねがね鎖国体制を批判していた幕末期の政治家・横井小楠の甥にあたる横井左平太・太平兄弟も教えており、彼らは日下部に先んじてラトガースへ向けて密航したのである。小楠は山林等を売って甥の留学費を工面したが、当時の千両など米国に着くまでの約半年間で全て消費したそうである。二人は鎖国体制崩壊直前のため密航の形となり、名前を伊勢佐太郎、沼川三郎と変名しての私費留学渡航だったのに対し、日下部太郎はいわゆる公費留学。維新直後で給

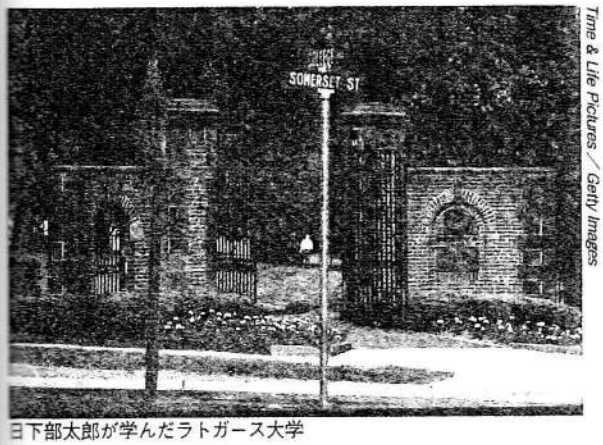
付金の内容は刻々変化したようであるが、当初越前藩から年百両、のちに二百五十両。一八六九年には明治維新政府から公式留学生として六百両が支給された。しかし年平均一千$必要といわれた留学費用には程遠い内容だったようである。それは日下部の実家・八木家にも多大の負担を強いた。留学費不足で困っている旨の太郎の報に、父・郡右衛門は相当の工面をし「大借金の八木家」となり、世間から誹謗中傷を受ける有様。「事情をよく勘案し帰国を願う」といった心を打つ切々たる手紙が残っている。父は一八六九年に太郎の弟次郎、三男を相次いで亡くし、その上藩政改革で福井藩の御使番を免じられ、経済的にも精神的にも奈落の底へ。その翌年、家族及び藩の至宝・太郎が客死したのである。

日下部の英才ぶりは尋常でなく、英語修得のグラマースクールを短期で修了、いわゆる飛び級で大学本科へ進学した。館長によれば、その後二十有余年の間に、約三百～四百名のラトガース大学留学生がいたものの卒業したのは僅かに四～五名だったとのこと。日下部は心震えるほど学業に励み、優等生の会員クラブ、「ファイ・ベータ・カッパ」の日本人最初の受賞者ともなった。しかし当時の食生活の遠因等もあり、重い結核を煩い死の床に伏し、一八七〇年肉体的な消耗死の様相を呈し、惜しみて余りある生涯を閉じた。ファイルボックスの中の文献によれば、科学科に在籍した日下部の成績原簿を発見した記録もあり、化学、幾何学、応用数学は百点満点。九十点以下の科目は一つもなく、専門外の歴史学、フランス語も百点、道徳哲学も九十九点など、唖然とする秀才ぶりであった。

＊

現代の日本では、誤解を恐れずに言えば、ふんだんに官費を使った米国留学が日常的になっている。霞が関の財務省、経産省、日銀、政投銀などの若手官僚が、公費留学する。それ自体は視野を広め推進すべき政策である。米国のハーバードやイエール、プリンストンやコーネルなど一流大学は私立大学が多い。同様にパブリック・アイビーといわれるUC（カリフォルニア大学）バークレー校、UT（テキサス大学）オースチン校、UM（ミシガン大学）アナーバー校といった一流州立大学の受け入れ難度はともかく、米国私立大学は潤沢な費用付き留学生受け入れには誰にでも寛容で、いいお客さんでもある。東大卒官僚等でも、苦学体験のない箔付け留学や、学位も取れず帰国する者も多い。管見によれば、留学組の大臣・次官級に対し「スピーチや政治折衝では半分以上何を言っているのか不明」と本音で評する米国人は少なくない。国内で通用する留学履歴が米国社会で通用しないのだ。理系のように科学的専門性が高ければ英語力や折衝力が不足しても原則対応できる。しかし政治・経済・法律等では洗練された圧倒的語学力が必要なのである。

ここ十年、入ってしまえば遊園地と言われる我国の大学に見切りをつけ、自力で米国のトップ大学に入学・卒業し、私立や州立の一流大学で文系博士号を取る若者も出てきた。自力で勝ち取った博士号取得者の初任給は二十七歳前後で、日本では信じられない既ね年十二万$（約一千二百万～一千四百万円）からスタートが約束される。一流の学位の価値は極めて高い。彼らは高い米国人脈を構築し、人種の壁も透視し、米国競争社会で勝ち切る可能性を秘めた猛者達。そこまでの要求は過酷だが、我国の政治家も先進国を自認するならば、首相や大臣に就く最低資格として「TOEFL六百点以上＋漢字検定一級＋α」の要件等が必要なのであろう。縦型共同体の村社会でなく、日下部太郎のように「日本の将来が世界の中で決まる」との思考回路を身体に刻み込んだサムライの帰国や出番が待たれる。



Time & Life Pictures／Getty Images

日下部太郎が学んだラトガース大学

送られたことを批判。「無罪でもうれしくないと、憤りをあらわにした。

弁護側は再審で、柳原さんの自白が虚偽だったことを証明するため、取調官の証人尋問を二度申請したが藤田裁判長は却下。冤罪の背景に刑事司法の構造的な問題があるとの疑問は解消されないままの決着で、裁判員制度が残した宿題となった。

実であるのに服役したことは誠にお気の毒です。（拘置中にたくなった）お父さまのことを思うと言葉がありません。これからの人生が充実したものになるよう心から願っています」と声を掛けた。

再審は、柳原さんの無罪を確定するため、検察側が申し立てた。検察側は証拠として、柳原さん

神奈川県議会総務企画常任委員会は十日、松沢成文知事が提出した知事の任期を恒久的に「連続三期十二年までに制限する多選禁止条例案を可決した。十二日の本会議で可決、成立する見通し。県による多選自粛を求める条例は埼玉県などに例があるが、多選を禁ずる条例は全国初という。

同委員会は施行時期について「多選制限は法律に根拠を置くことが必要」などの慎重意見に配慮し、「条例案公布の日から施行」としていたのを「別に条例で定める日から施行」と修正した。

施行は、事実上、地方自治法などの改正で条例による多選制限を認める規定が設けられた後になるとみられる。

多選禁止は松沢知事の公約。可決を受け、松沢知事は十日午後の記者会見で「突破口を開くことができた」と国に積極的に法改正を働き掛けていく方針を示した。

多選については、行政の停滞につながるといった指摘がある一方、現在四期目の高知県の橋本大二郎知事らからは「県民の選択肢を縛る」といった批判の声も出ている。

同委員会は、自民党議員などから慎重な意見が続出したため紛糾し、九日午前から十日未明まで断続的に審議が続いた。

松沢知事は昨年の十二月県議会にも同様の条例案を提案したが「職業選択の自由を定めた憲法に抵触する可能性がある」などの反対意見が出るなどして否決された。

今年四月の知事選で多選禁止をマニフェストに掲げ込んで再選を果たし、政運営が危機的状況にあると指摘。低迷する経済も踏まえ「行政組織トップとしての責任はれない」としている。

高知県は二〇〇三年に、退職金が任期ごと支給されるよう条例を正。四期十六年務め今限りで退任を表明している橋本知事は、これまでに計約一億五千万円を返上した。

福井が残した宝物

福井とニューブランズウィックの25年

ＪＣの渡米発端

1

福井藩の期待を背負って寝食を忘れ勉学に励んい、百四十年前の一八六七年、日下部太郎は米国ニューブランズウィックして三年後、病に倒れる。市のラトガース大に留学しかし日下部の遺志は同した。時代は幕末、明治大の先輩、ウィリアム・維新を目前にした激動グリフィスとの友情を介期。日本の近代化を夢見し、福井市とニューブラ

ンズウィック市の姉妹都市提携という形で花開いた。日下部とグリフィスが残したものとは何か。提携から四半世紀を迎え、福井市民訪問団が友情の軌跡をたどった。

（社会部・伊豆倉知）

継続こそ交流の意義

再会を喜びケーヒル市長と握手を交わす奈良福井市国際交流協会長（左）＝8日、ニューブランズウィック市役所

摩天楼が広がるニューヨークから南西約五十キロ。世界一の大都市のけん騒とは一転、レンガ調の建物が並ぶ美しく静かな街、ニューブランズウィック市がある。

市民団が市役所に到着した今月三日、提携時から携わる市国際交流理事のジェーン・タブリンさん、八月にジュニア大使六人と来福したリビングストン校のジェレマイア・クリフォード校長らが笑顔で出迎えていた。団長の奈良一機福井市国際交流協会長はジェームス・ケーヒル市長とがっちり握手を交わし、再会を喜んだ。

両市の交流のきっかけは三十三年前。福井青年会議所（ＪＣ）のメンバーが会食した席での何げない会話だった。「福井にすごい男がいたらしい」。日下部の名前が挙がり、ひとしきり話題となった。しかし、人物像や業績はよく分からない。その輪にいた酒井康行さんら三人が一九七五年に渡米。調査研究のため同大を訪れた。

まだ「国際交流」という言葉が一般的でなかった時代。ＪＣが顕彰事業を行うことに「何をなし得た人物なのか」と慎重意見も根強かったが、酒井さんらは「病に伏してなお、勉学をやめなかった日下部の精神を教育の道しるべに」と事業を推進した。七六年、市立図書館敷地に二人の胸像をはめ込んだ記念の「顕彰碑」を建立。百年以上の時を経て二人の友情をよみがえらせた。この顕彰事業がやがて八二年の姉妹都市提携につながった。

当時福井市には国際交流担当部署がなく、企画調整課職員だった奈良会長らが事務を担当。初の姉妹提携をきっかけに国際交流機運が急激に高まり、七年後の八九年に国際交流室（翌年課に昇格）が新設された。奈良会長が初代室長に就き、米国フラトン市、中国瀋州市と相次いで友好交流提携を進め、六年前には韓国水原市とも提携を結んだ。

奈良会長は同課から異動した後も、自費のニューブランズウィック市訪問を繰り返してきた。クリスマスカードを欠かさず交換するなど個人的なつながりを大切に築き、育てている。「交流とはたとえ小さくても、温め続けることが大切だと思います」。三日のケーヒル市長への表敬あいさつで述べた言葉には、二十五年分の実感がこもっていた。

19日
10/2～10/8迄
福井より訪問団に
福井新聞の
紹介記事
同行
した。

駐日米大使
JD ホッパー
大使

がいたものの卒業したのは僅かに　イビーといわれるＵＣ（カリフォ　で、日本では信じられない概ね年

福井市・米国ニューブランズウィック市

姉妹都市提携が30周年を迎えます

日下部とグリフィスとの親交と足跡

日下部 太郎
(1845～1870年)
福井市生まれ

幼い頃から優秀だった日下部は、慶応3年（1867）、23歳のときに、福井藩第1号の海外留学生として米国に渡り、1年後、ラトガース大学に入学した。

勉強熱心な日下部は優秀な成績をおさめ、多くの人々から賞賛された。しかし、貧しさによる苦しい生活と気候風土の違いにより、卒業を目前にして病に倒れ、26歳の若さで世を去った。

ラトガース大学では、日下部の死を惜しみ、卒業生名簿に彼の名を加えるとともに、首席卒業生だけに贈られるゴールドキーを贈り、その生涯をたたえた。

ウィリアム・E・グリフィス
(1843～1928年)
米国フィラデルフィア市生まれ

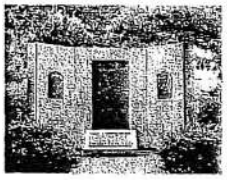
1865年、ラトガース大学に入学し、その後、同大学のグラマー・スクール（外国語学校）で日下部にラテン語を教えた。このとき、日下部の熱心な勉学態度を見て、日本人の勤勉さに心を打たれた。

志半ばで亡くなった日下部との友情に報いるため、福井藩の教師として1871年に来福した。かつて日下部が学んだ福井藩の藩校「明新館」での授業では、物理学や化学を、実験を通して丁寧に根気強く教え、近代福井を担う多くの優秀な人材を育てた。

約10か月で福井を去ることになったが、その熱心な人柄は多くの市民から慕われた。

～日下部とグリフィスの足跡をたどる～

墮涙碑（だるい）（文京2丁目7-7）



㈳福井青年会議所により建てられた、日下部の死を惜しむ記念碑。

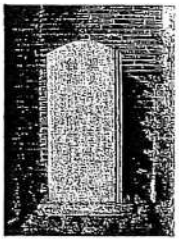
清円寺（宝永4丁目）

日下部の菩提（ぼだい）寺。

郷土歴史博物館（宝永3丁目）

日下部が留学時に使用していた教科書（複製）やゴールドキー、グリフィスが福井藩と交わした雇用契約書（複製）などを展示。

異人館跡石碑（中央3丁目13-13）

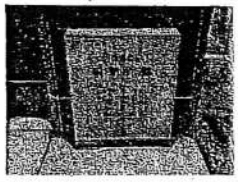


グリフィスの住居跡。

市内初の洋館で、ベランダがあり、明治初期の典型的な洋風住宅だった。

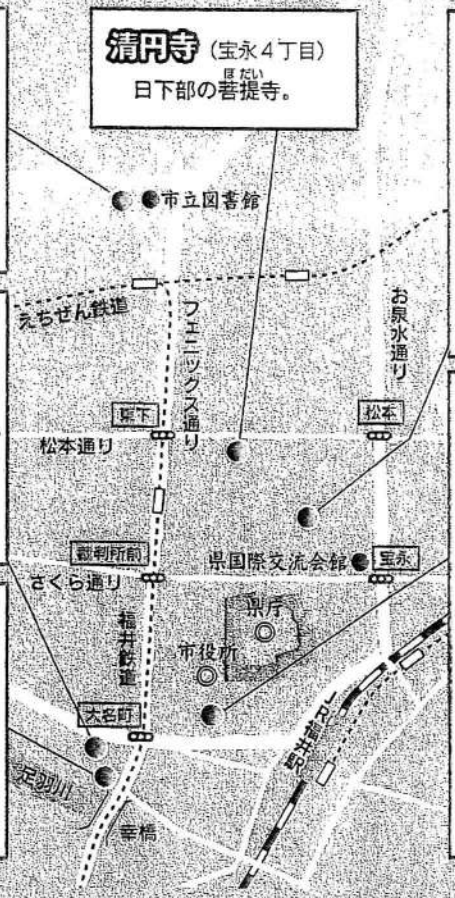
明道館（明新館）跡（大手3丁目4-1）

安政2年（1855）に福井藩主・松平春嶽が設立した藩校で、明治維新により明道館から明新館に改称した。日下部が幼少期に学問に励んだ場所であり、後にグリフィスが物理学や化学などを教えた場所。



日下部・グリフィス像（中央3丁目14）

両市の姉妹都市提携20周年を記念して、幸橋北詰に設置された像。



ニューブランズウィック市には、日下部の墓があります。また、ラトガース大学には、日米友好のギャラリーのほか、グリフィスが日本滞在中に記した日記や収集した資料があります。

市は、今後も、日下部とグリフィスの友情を原点とした両市の絆を次世代に語り継ぎ、将来にわたる両市民の交流を支援していきます。

問い合わせ　市民協働・国際課　☎20－5300

今日までの交流経過

提携までの経緯

昭和50年（1975年）、郷土史を研究していた青年会議所の人々が、日下部太郎の足跡を訪ねるため渡米したことが契機となり、両市民の交流が再び始まりました。

また、福井大学とラトガース大学の間で、昭和56年（1981年）、姉妹大学の盟約が締結され、「日下部・グリフィス学術文化交流基金」などを通じて、研修者、学生の交換等、文化、教育面での交流が続けられてきました。

昭和57年5月25日（1982年）、福井市とニューブランズウィック市の両市長は、両市の永遠の友好を約し、世界平和と人類の福祉に貢献することを誓い合い、姉妹都市盟約書に調印しました。

1977年10月　日下部太郎の100年忌に福井市長参列。

1980年12月　ニューブランズウィック市（以下NB市）の300年祭に福井市長が招待される。

1981年10月　NB市長を福井に招待。
福井大学とラトガース大学、姉妹大学提携調印。

1982年5月　NB市と姉妹都市提携調印（25日同市にて）

1984年8月　NB市長一行を第31回福井フェニックスまつりに招待。

1986年5月　民間で初めて、高校生合唱団「ボーカルダイナミックス」の一行が来福。

1986年7月　市内の少年少女で編成された福井ジュニアオーケストラ友好使節団一行が訪問。音楽を通じて交流を深めた。

1987年8月　国際姉妹都市賞（リーダース・ダイジェスト財団）受賞。
NB市の代表来福、市長に賞の報告・贈呈。

1988年3月　「第2回 ふくい国際ビデオビエンナーレ」におけるサテライトアートにてNB市と衛星通信で交流。

1988年8月　NB市長一行を第35回福井フェニックスまつりに招待。市民交流懇話会開催。
福井放送がNJNニュージャージーネットワークと姉妹局提携。

1989年4月　NB市長一行を福井市制100周年記念式典に招待。

1989年5月　福井市議会議長一行がNB市を友好親善訪問。

1989年8月　「第3回 ふくい国際ビデオビエンナーレ」におけるサテライトアートにてNB市と衛星通信で交流。

1990年3月　全米姉妹都市絵画コンクールに福井市とNB市の中・高校生の作品を出展。
また、NB市は姉妹都市 中・高校生絵画展を開催。

1991年8月　NB市から6名の中・高校生が学生交流のため来福。
第1回福井市ジュニア大使3名を派遣。ケーヒル市長を表敬訪問。

1991年10月　米国姉妹都市福井市民代表団8名がNB市とフラトン市を訪問。

1992年7月　姉妹都市提携10周年を記念して、ラトガース大学学長代表団14名が来福。

1992年10月　姉妹都市提携10周年を記念して、福井市民代表団9名がNB市を訪問。

1992年11月　姉妹都市提携10周年を記念して、ラトガース大学名誉教授・元副学長アーダス・バークス博士来福、藤島高校にて記念講演。

1994年 3月　第４回福井市ジュニア大使10名を派遣。ケーヒル市長表敬訪問。

1994年 6月　ラトガース大学ジマーリ美術館に日下部グリフィス・ジャポニズムギャラリーが完成。福井市長はじめ市民代表団13名が訪問。

1995年10月　世界体操協議選手権大会の開催に合わせ、ジェームズ・ケーヒルNB市長一行９名が来福。

1996年７月　福井市国際青少年会議出席のため２名の高校生が来福。

1997年４月　第7回福井市ジュニア大使10名を派遣。

1997年10月　全米インターナショナル絵画展で福井市から出展した作品が優秀賞を受賞。NB市国際交流課長ジェーン・タブリン女史一行が入賞賞金持参等のため来福。

1997年11月　NB市から中・高校生７名が秋季交流のため来福。

1998年６月　世界震災都市会議にNB市代表団４名が参加。

1999年７月　NB市女性団３名が来福。

2000年３月　第10回福井市ジュニア大使10名を派遣。

2000年６月　2000年世界女性会議の翼12名、NB市訪問。

2000年11月　NB市教育関係者一行７名が来福。

2002年10月　前NB市長・前ニュージャージー州上院議会議長ジョン・リンチ氏一行20名が来福。福井県生活学習館にて姉妹都市提携20周年記念シンポジウムを開催。福井市美術館にて姉妹都市提携20周年記念展を開催。

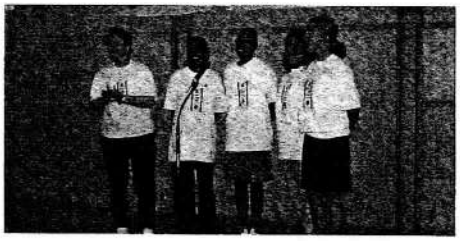
2002年11月　姉妹都市提携20周年を記念して、福井市民訪問団24名がNB市を訪問。

2003年４月　姉妹都市提携20周年記念「日下部太郎・グリフィス像」が完成。（福井市中央3丁目 足羽川幸橋北詰）

2003年７月　第13回福井市ジュニア大使10名を派遣。

2004年４月　NB市訪問団5名が来福、ふくい春まつり「越前時代行列」に参加・視察。

2004年８月　NB市中・高校生3名が学生夏季交流のため来福。



2005年10月　福井市代表団3名が、インターナショナル ガラ（姉妹都市の祝典）参加のためNB市を訪問。祝典にて、両市の歴史的な結びつきを掘り起こしたアーダス・バークス博士へ福井市より感謝状を贈呈。

2005年12月　NB市で開催されている「木の祭り」に初めて参加。市内3校の中学生により作成された木の飾り物を出展。

2006年３月　第16回福井市ジュニア大使10名を派遣。ボビー・レシーン議長表敬訪問。

あれから四十年
（平成二十九年九月十八日発行）
編集者　酒井　康行
印刷所　株式会社　ディプリス